

19 世紀中葉のケルン大聖堂建設祭

—— 「新聞資料」から見える祭典の構造的特徴 ——

棚橋 信明

Die Struktur der Kölner Dombaufeste in der Mitte des 19. Jahrhunderts

Nobuaki TANAHASHI

はじめに

ケルン大聖堂の建設は、1842年9月の定礎式をもっておよそ280年ぶりに再開され、1880年10月についてその完成を見る。1842年の定礎式は、建設再開の最大の功労者であるプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世を迎え、「大聖堂建設祭 (Dombaufest)」と称する大規模な祭典をもって祝われたが、その後1845年、1848年、1852年、1855年、1863年、1867年にも大聖堂の建設を祝う祭典が開催された。そして、皇帝ヴィルヘルム1世を迎え竣工式を祝う1880年の祭典が近代における最後の大聖堂建設祭となった。本稿は、この帝制期に行われた祭典を除く、すなわち19世紀中葉に開催された計7回の大聖堂建設祭を取り上げ、祭典の具体的姿を浮かび上がらせるとともに、その構造的特徴を明らかにしようとするものである。その際に手がかりとするのは、ケルンで発行される新聞各紙に掲載された報道記事と関連する種々の広告である¹⁾。

大聖堂建設祭がおおよそ3～4年ごとに開催された19世紀中葉は、ドイツでは国民的統一という見通しの極めて困難な課題をめぐって、様々な政治的勢力がせめぎ合う混沌の時代であった。そもそもナポレオン戦争後に始動した大聖堂建設運動の原動力は、戦争におけるドイツの勝利を記念するとともに、将来の統一ドイツを象徴する「国民記念碑教会」を建設しようとする動機にあった。そして、大聖堂建設運動において指導的役割を果たしたのは、自由主義勢力としての党派の結集を次第に明らかにし、「自由と統一」を求める「下から」の圧力を強めていったいわゆる近代の市民層であった。大聖堂建設祭を主催した「大聖堂建設中央協会 (Central-Dombau-Verein)」（1842年2月に設立）の指導部も、ケルンの市民層により占められていた²⁾。

こうした背景もあり、大聖堂建設祭には「自由と統一」をめぐる諸勢力の対立と抗争がしばしば反映されることになった。まず、1842年9月の大聖堂建設祭では、自由主義勢力による「下から」の統一運動を牽制する意味での「保守的勢力の結集」が顕示された。定礎式会場のステージ上には、主役を演じるプロイセン国王とともに多くのドイツ諸侯が立ちならび、「国民記念碑」の前で統一問題における君主の主導権が主張されたのである³⁾。続く1848年8月の大聖堂建設祭は、3月に勃発した革命の決着が未だ見えないなかで開催された。この祭典には、君主権力の代表者たるプロイセン国王のほかにも、「下から」のドイツ統一を進めようとしていたフランクフルト国民議会の代表者たちも招待された。そして、両者による政治的優位をめぐる「駆け引き」が祭典を通じて展開されたのである⁴⁾。また、1863年10月の大聖堂建設祭は、プロイセン憲法紛争のただ中での開催となった。自由主義左派が優勢にあったケルン市議会は、この祭典への協力を拒否する態度をとり、不穏な空気を察知したプロイセン国王ヴィルヘルム1世は、祭典の3日前に参列の取りやめを通達してきた⁵⁾。

このように政治的抗争の持ち込まれることが多々あった大聖堂建設祭は、48年革命を挟む19世紀中葉のドイツの政治史的展開のなかでどのような役割と意義をもったのであろうか。19世紀になりドイツで

は、新しい形態の大衆的規模の祭典が各地で開催されるようになる。こうした祭典はナショナリズムの広域的な発展とのリンクするもので、急進的な自由主義運動と結びついた 1832 年 5 月のハンバッハ祭はその先駆けであった。その後 40 年代～60 年代には、ドイツ全土に活動の広がった男声合唱協会や体操協会により、大規模な国民的祭典が頻繁に開催された。ケルンの大聖堂建設祭も「国民記念碑」の建設を祝うという意味で、こうした国民的祭典の一つに数えることができる。ただし、上記の国民的祭典のほとんどが既存の政治権力と距離を置く「反体制的祭典 (Oppositionsfest)」であったのに対して、大聖堂建設祭はプロイセン国王に重要な役割を与えるもので、君主と市民による「連帯祭 (Solidaritätsfest)」の性格をもったとみられる⁶⁾。

近年のドイツ社会史研究の多様な発展のなかで、このような 19 世紀の国民的祭典に関する新しい政治文化史的アプローチも試みられるようになった。こうした研究により、祭典における政治的シンボリズムの意味やソシアビリテの問題などが取り上げられるようになってきている。しかしながら、現在までのところ、こうした新しい観点による研究の展開は不十分なものとどまっておき、ケルンの大聖堂建設祭に関するこれまでの研究においても、政治事件史のあるいは宗教史的観点が優勢であるといえる。資料解題を基礎とする本稿における限定的考察は、今後、大聖堂建設祭のもった政治文化史的な意味に関して踏み込んだ検討を進めていくための端緒とすべきものである⁷⁾。

1. 大聖堂建設祭の行事日程

図 1 は、1863 年の祭典当日である 10 月 15 日に、カトリック系の日刊紙『ケルニッシェ・ブレター』(以下 *KB* と表記)の広告欄に掲載された大聖堂建設祭のプログラムを転載したものである。1863 年の大聖堂建設祭に際しては、同紙と自由主義系の『ケルニッシェ・ツァイトウンク』(以下 *KZ* と表記)に、これと同一のプログラムが祭典 4 日前より繰り返し公表された⁸⁾。

このような祭典プログラムは、1842 年の大聖堂建設祭の時より大聖堂建設中央協会の機関紙である『ケルナー・ドームブラット』(以下 *KDbI* と表記)に事前に公表されるのが通例であった。1842 年 7 月 3 日にその第 1 号が発行された *KDbI* は、会員にのみに配付されたのではなく、*KZ* に折り込まれてその予約購読者に無料で届けられた。この *KZ* はケルンの市民層に広く読まれていたが、その購読者はライン州の諸都市にも広がっていた。ちなみに 1842 年の発行部数は 8,310 部であったが、その約 7 割がケルンの外で講読されていた⁹⁾。1845 年 1 月以降、*KDbI* が週刊から月刊となったこともあり、これ以降は、一般紙に掲載されたプログラムや次章で取り上げる種々の広告が、広範な人びとに祭典への関心を喚起したのである。

図 1 からわかるように、新聞に掲載されたプログラムから人びとは行事日程に関して詳細に知ることができた。これには祭典を構成する各行事の開始時刻や会場のみでなく、祭典行列についてはその編成や行進する経路までが示されていた。また、国王を歓待する行事や国王が参列する式典等についても漏らさず記載されていた。このようなプログラムの詳細な記載は、祭典行事の参加者のみでなく、ケルンの内外から見物に集まってくる人びとの関心に配慮したものであったと考えられる。

表 1 の A～F は、おもにこうしたプログラムに基づき、19 世紀中葉に開催された 6 回の大聖堂建設祭について行事日程を整理したものである。ここに記載のない 1855 年 10 月 3 日の大聖堂建設祭は、ライン河の常設橋及びヴァルラフ・リヒャルツ美術館の定礎式と連続した総合的祭典の一部として開催されたため、表 1 の整理からは除外した。これらの表を一瞥して、一連の大聖堂建設祭は決して画一的な行事日程をもって開催されたわけではなく、そもそも祭典の日数も行事の数からみる規模も、さらに様々な行事の組み合わせにおいても変化に富んでいたことが見て取れる。それでも、1855 年の祭典を含めて行事日程を比較検討するならば、大聖堂建設祭の多くに共通する行事やその組み合わせの特徴が浮かび上がってく

Program

für das

Dombau-Fest am 15. und 16. October 1863.

Am Vorabende: von 6 bis 7 Uhr feierliches Geläute in allen Kirchen von Köln und Deutz. — Kanonen- und Völler-Salven auf beiden Rheinufnern.

Erster Festtag.

- 1) Feierliches Einläuten und Kanonendonner wie am Vorabende, Morgens von 8 bis 9 Uhr.
- 2) Festzug der Vereinsgenossen. Dieselben versammeln sich Morgens gegen 8 Uhr auf dem Neumarkte. Sie tragen einen Palmzweig im Knopfloch an der linken Seite; die Mitglieder des Vorstandes und die Zugordner zugleich als besonderes Erkennungszeichen eine Rosette in städtischen Farben. Der Vorstand mit dem Vereins-Banner und einem Musikcorps begibt sich vor 9 Uhr vom Rathhause aus zum Versammlungsplatze.

Der Festzug bildet sich:

- 1) Ein Musikcorps.
- 2) Die Schufen.
 - a. Domschule mit ihrem Gesang-Chor,
 - 3) Die Lehrer-Collegien.
 - 4) Die Dombanhütte mit ihren Fahnen, Emblemen und dem Vereinsbanner.
 - 5) Der Vorstand, die geladenen Ehrengäste, die Deputationen der Hülf-Bereine und die Mitglieder des Dombau-Bereins.
 - 6) Die Behörden, welche sich dem Zuge anschließen wollen:
 - a. die Justiz-, Verwaltungs- und Militär-Behörden der Städte Köln und Deutz,
 - b. die städtischen Corporationen, als: Ober-Bürgermeister und Beigeordnete der Stadt Köln,
 - c. Beigeordnete und Stadtrath von Deutz,
 - d. die Mitglieder der Handelskammer von Köln,
 - e. " " des Gewerbegerichts,
 - f. " " der Armenverwaltung,
 - g. " " der Schulverwaltung,
 - h. " Consulate.
 - 7) Die eingeladenen Geistlichen der verschiedenen Confessionen, welche sich am Zuge theilnehmen wollen.
 - 8) Zweites Musik-Corps.
 - b. Realschule mit ihrem Gesang-Chor;
 - 9) Die Vorstände der verschiedenen Musik-Institute und Vereine der Stadt Köln.
 - 10) Die Gesang-Bereine Kölns:
 - a. der Männergesang-Berein Cäcilia,
 - b. " " Polyhymnia,
 - c. " " Apollo,
 - d. " " Germania,
 - e. " " Concordia,
 - f. " " Liederkrauz St. Ursula,
 - g. " Bürger- und Handwerker-Gesang-Berein.
 - 11) Die katholische Pfarrgeistlichkeit.
 - 12) Das hochwürdigste Dom-Capitel.
 - 13) Die hochwürdigsten Bischöfe und Se. Eminenz der Cardinal und Erzbischof, welche bei St. Andreas in den Zug eintreten werden.

- 14) Der Vorstand des Bürgervereins.
- 15) Der Vorstand der Meisterschaft.
- 16) Der Vorstand des Gewerbevereins.
- 17) Die Vorstände der Kunstvereine und des Künstlervereins.
- 18) Die sämtlichen Innungen der Stadt Köln.
- 19) Der St. Elogiusverein der Schlossermeister.
- 20) Der gesellige Cuniberts-Bauverein.
- 21) Drittes Musikcorps.
 - c. die Gymnasien mit ihren Gesang-Chören.
- 22) Der Gesellenverein.
- 23) Die Bruderschaften und Congregationen von Köln und Deutz.
- 24) Die sämtlichen Filial-Dombauvereine Kölns mit ihren Fahnen und Emblemen.

Der Zug setzt sich vom Neumarkte aus um 9 Uhr, in zwei Reihen, durch folgende festlich geschmückte Straßen: Apostelnstraße, Breitstraße, Verlich, am Regierungs-Gebäude vorbei, durch die Zeughausstraße, Comödienstraße, unter Fettenhennen zum Westportale des Domes in Bewegung.

Während des Einzugs in den Dom Festgesang des Kölner Männer-Gesang-Bereins.

Nach dem Eintritte des Zuges in den Dom: Feierliches Pontifical-Hochamt. Am Schlusse: Te Deum.

Nach Beendigung des Gottesdienstes, in der Sacristei: Vollziehung der zum ewigen Gedächtniß der Feier und zur Aufbewahrung im Schlußsteine der Bierung gefertigten Urkunde.

3 Uhr Nachmittags: Festessen auf dem Gürzenich.

7 Uhr Abends: Beleuchtung des Domchores und der Transepte.

9 Uhr Abends: Fest-Gala-Ball im Casino-Saale.

Zweiter Festtag.

Morgens 9 Uhr Gottesdienst im Dome: Gedächtnißfeier für die verstorbenen Dombau-Freunde.

Zug der Vereinsgenossen mit dem Vorstande und dem Vereins-Banner, einem Musikchor an der Spitze, zur Haupt- und Wahl-Versammlung nach dem Rathhausplatze.

Allgemeines, dem Feste entsprechendes Lied, nach der Melodie: „Laßt Gesanges Irbel zc.“

Ansprache des Vorstandes-Präsidenten.

Rechenschaftsbericht des Vorstandes durch den Secretär.

Erledigung etwa vorliegender Anträge. — Wahlact.

Nachmittags 2½ Uhr: Vorstandes-Sitzung. Dankesausspruch an die auswärtigen Deputationen und Dombau-Freunde.

Nachmittags 3 Uhr: Gartenfest und Concert in den ihrer Bekleidung entgegengehenden Anlagen der Flora.

Besichtigung des Domes, der Schätze, des Museums für die auswärtigen Gäste zc.

Abends 7 Uhr: Concert im großen Gürzenich-Saale. Nur die geladenen Ehrengäste erhalten Karten zum freien Eintritt.

図 1 1863年の大聖堂建設祭のプログラム

表 1 - A 1842年の大聖堂建設祭の行事日程

●9月3日（土曜日）〈祭典前日〉	
19:00～20:00	教会の鐘と祝砲による祭典開催の予告。
*19:30	国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世と王妃の到着と歓迎。
*21:00	ランタン行列。聖ゲレオン教会前の広場（Gereondriesch）→県庁（国王滞在）。
●9月4日（日曜日）〈祭典当日〉	
5:00～6:00	教会の鐘と祝砲による祭典開催の合図。
7:30	協会旗の行進。市庁舎前広場（Rathausplatz）→ノイマルクト（Neumarkt）。
8:00	祭典行列①の集合・出発。ノイマルクト→大聖堂西玄関。
9:00	大聖堂での盛式ミサ。 祭典行列②。大聖堂西玄関→大聖堂南の広場（Domhof）。 大聖堂南の広場での定礎式典。
*14:30	大聖堂南西の広場（Domkloster）に設置された天幕での祝宴。
*19:30	蒸気船によるライン河遊覧。ライン河岸のイルミネーション。

註：*印の行事については、出典に示す新聞に発表されたプログラムに含まれなかったが、実際に開催された大聖堂建設祭に関する以下の新聞記事で知ることができ、事前に準備されていたものとしてここに含めた。*Kölnische Zeitung*（以下 *KZ* と略記）、Nr. 248/249, 6. September 1842 *Reinische Zeitung*, Nr. 248-49, 6. September 1842.

出典：*Kölner Domblatt*（以下 *KDbl* と略記）、Nr. 9, 28. August 1842.

表 1 - B 1845年の大聖堂建設祭の行事日程

●5月26日（月曜日）〈祭典前日〉	
19:00～20:00	教会の鐘による祭典開催の予告。
●5月27日（火曜日）〈祭典第1日〉	
5:00～6:00	教会の鐘による祭典開催の合図。
7:30	協会旗の行進。市庁舎前広場→大聖堂西玄関。
8:00	大聖堂での盛式ミサ。
—	祭典行列。大聖堂西玄関→大聖堂東のフランケン広場（Frankenplatz）。
11:30	フランケン広場での大聖堂建設中央協会の総会。
15:00	ギュルツェニヒ（Gürzenich）で大聖堂建設中央協会会員の祝宴。
●5月28日（水曜日）〈祭典第2日〉	
6:00	植物園（大聖堂北）に協会会員が集合。
10:00	大聖堂と大聖堂建設工房の見学会。
17:30	フランケン広場で協会会員の式典。
21:00	ギュルツェニヒで協会会員の舞踏会。

出典：*KDbl*, N. F. Nr. 4, 27. April 1845.

表 1 - C 1848年の大聖堂建設祭の行事日程

●8月13日（日曜日）〈祭典前日〉	
*19:30	フランクフルト国民議会の代表団のトランクガッセ埠頭（Trankgasse Werft）到着と歓迎。
*深夜	ランタン行列。帝国摂政ヨハン大公（Erzherzog Johann von Österreich）と国民議会議長ガーゲルン（Heinrich von Gagern）の宿舎へ行進。
●8月14日（月曜日）〈祭典第1日〉	
9:00	ノイマルクトでの市民軍のパレード。
11:00	カジノ（Casino）の大ホールで男声合唱協会によるコンサート。
13:00	市庁舎で大聖堂建設中央協会理事会の会議。 協会旗の行進。市庁舎前広場 → ノイマルクト。
15:00	祭典行列①の集合・出発。ノイマルクト → 大司教館 → 大聖堂西玄関。
—	大聖堂での式典。大聖堂建設監督による完成した身廊部の大司教への引き渡し。 バイエルン国王ルートヴィヒ1世によって寄贈されたステンドグラスの除幕式。
18:00	国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世のトランクガッセ埠頭到着と歓迎。
21:00	ランタン行列。市庁舎前広場 → 県庁舎（国王・ヨハン大公滞在）・大司教館など。
●8月15日（火曜日）〈祭典第2日〉	
7:00	大聖堂での式典（完成した部分の聖別式）。
7:00	市庁舎で大聖堂建設中央協会理事会の会議。 協会旗の行進。市庁舎前広場 → ノイマルクト。
7:30	祭典行列②の集合・出発。ノイマルクト → 大聖堂西玄関。
10:00	大聖堂で盛式ミサ。国王・ヨハン大公の参列。
16:00	ギュルツェニヒでの祝宴。
21:00	街全体のイルミネーション（大聖堂、教会、塔、ライン河の浮き橋など）。
●8月16日（水曜日）〈祭典第3日〉	
8:00	大聖堂での盛式ミサ。 祭典行列。大聖堂西玄関 → フランケン広場。
9:00	フランケン広場で大聖堂建設中央協会の総会。
17:00	ギュルツェニヒでのコンサート。
22:00	ギュルツェニヒで協会会員の舞踏会。

注：*印の行事については、出典に示す新聞に発表されたプログラムに含まれなかったが、実際に開催された大聖堂建設祭に関する以下の新聞記事で知ることができ、事前に準備されていたものとしてここに含めた。KDbI, N. F. Nr. 43, 8. Oktober 1848; KZ, Nr. 228, 15. August 1848.

出典：KDbI, N. F. Nr. 41, 30. Juli 1848; Neue Rheinische Zeitung（以下 NRhZ と略記）, Nr. 71, 10. August 1848; NRhZ, Nr. 74, 13. August 1848.

表 1 - D 1852年の大聖堂建設祭の行事日程

●6月25日（金曜日）	
7:30	協会旗の行進。市庁舎前広場 → 大聖堂の南西広場（Domkloster）。
8:30	国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世の大聖堂西玄関到着。
—	国王が西ファサードのアーチ天井に要石の挿入を行う式典。
—	国王の大聖堂内及び建設工房の視察。

注：1852年の大聖堂建設祭のプログラムは新聞に事前に掲載されなかったため、この表は実際に開催された大聖堂建設祭に関する下記の新聞記事を参考にして作成した。

出典：KDbI, N. F. Nr. 91, 4. Oktober 1852; KZ, Nr. 153, 26. Juni 1852.

表 1 - E 1863年の祭典プログラム

●10月14日（水曜日）〈祭典前日〉	
19:00～20:00	教会の鐘と祝砲による祭典開催の予告。
●10月15日（木曜日）〈祭典第1日〉	
8:00～9:00	教会の鐘と祝砲による祭典開催の合図。
8:50	協会旗の行進。市庁舎前広場 → ノイマルクト。
9:00	祭典行列①の出発。ノイマルクト → 大聖堂西玄関。
10:00	大聖堂での盛式ミサ。
15:00	ギュルツェニヒの大ホールでの祝宴。
19:00	大聖堂内陣とトランセプト（翼廊）のライトアップ。
21:00	カジノの大ホールでの舞踏会。
●10月16日（金曜日）〈祭典第2日〉	
9:00	追悼ミサ。
	祭典行列②。大聖堂 → 市庁舎前広場。
	市庁舎前広場での大聖堂建設中央協会の総会。
14:30	大聖堂建設中央協会の理事会の会議。
15:00	植物園フローラ（Flora）での庭園祭とコンサート。
20:00	ギュルツェニヒの大ホールでのコンサート。

註：1863年の大聖堂建設祭のプログラムは、出典に示す新聞各紙に繰り返し発表されたが、*KDbI*, N. F. Nr. 223, 31. 8. 1863 に掲載のプログラムが確定版であり、*KZ* 及び *KB* に掲載されたものはこれとほぼ同内容である。

出典： *KDbI*, N. F. Nr. 221/222, 31. Juli 1863; *KDbI*, N. F. Nr. 223, 31. August 1863; *KZ*, Nr. 282, 11. Oktober 1863; *KZ*, Nr. 285, 14. Oktober 1863; *KB*, Nr. 288, 11. Oktober 1863; *KB*, Nr. 290, 14. Oktober 1863; *KB*, Nr. 291, 15. Oktober 1863.

表 1 - F 1867年の祭典プログラム

●9月4日（水曜日）	
9:00	大聖堂における盛式ミサ。
	祭典行列。大聖堂南玄関 → 大聖堂西玄関。
12:00	西玄関前での式典。十字花飾りの序幕式。
	大聖堂東側のテラスで大聖堂建設中央協会の選挙集会。
14:30	ギュルツェニヒでの祝宴。
17:00	植物園フローラでの庭園コンサート。
19:00	植物園フローラのライトアップと親睦会。
21:00	蒸気船によるライン河遊覧。大聖堂東側のイルミネーション。

出典： *KZ*, Nr. 242, 1. September 1867.

そこで以下では、表 1 の A ～ F を参照しながら、多くの祭典に共通に見られた行事を早朝に行われるものから順に取り上げ、各行事の実施状況と具体的内容について、各新聞に掲載された報道記事を基礎資料としながら概括的な解説を進めることにしたい。

a) 協会旗の行進

協会本部（所在地は Rathausplatz 3）に保管される大聖堂建設中央協会の協会旗を祭典会場に運び出すための儀式であり、1842 年、1845 年、1848 年、1852 年、そして 1863 年の祭典プログラムに組み入れられていた。その目的から出発が午前 7 時半といった朝早くに行われるのが通例であった。ただし、1848 年の祭典第 1 日については、この行事に接続する祭典行列が午後のお発でであったため、その時間に合わせて行われた。この行事によって協会旗は、市庁舎前広場（Rathausplatz）から祭典行列の起点となるノイマルクト（Neumarkt）や大聖堂の祭典会場へと運ばれることになった。音楽隊の先導のもと、協会旗を掲げもったのは各教区から選出された協会の長老 20 名であり、それに続いて中央協会の理事と地方の支援協会の代表者が隊列を組んで行進するのが一般的であった。

b) 祭典行列（Festzug）

昼間に行われる祭典行列は、大きく 2 種類に分けられる。ノイマルクトを出発して大聖堂西玄関に至り大聖堂内でのミサに接続するものと、ミサの終了後に大聖堂を出て次なる祭典行事の会場に向かうものである。このうち前者の祭典行列は 1842 年、1848 年、そして 1863 年の大規模な祭典で見られるもので、行列の規模も大きかった。1848 年の大聖堂建設祭では、1 日目と 2 日目にそれぞれ異なる編成と経路による 2 回の祭典行列が行われている。それに対して、後者はミサの参列者を中心に編成されるもので、1842 年、1845 年、1863 年、そして 1867 年の祭典で見られた。そのなかで 1845 年と 1863 年の行列は、ミサの終了後、大聖堂建設中央協会の総会の会場を目ざすもので、したがって参加者の大部分は協会の会員であり、行列の編成は比較的小規模なものになった。以下では、行進する距離も長かった前者の祭典行列について概要を見ていきたい。

1842 年と 1848 年のノイマルクトを出発する祭典行列の経路は、図 2 の地図中に示されている。そのなかで、1848 年の 1 日目の大司教館を経由する祭典行列（図中の⑤）が、行程としては最も長く約 1.8 km であった。この行列がゲレオンシュトラッセ（Gereonstr.）の大司教館に立ち寄ったのは、そこで大司教と各地からケルンに來訪した司教たちを行列に迎え入れ、大聖堂まで同伴するためであった。また、その翌日、シルダーガッセ（Schildergasse）からホッホシュトラッセ（Hochstr.）に入る祭典行列の行程（図中の⑥）が最も短く 1.1 km ほどであった。ただし、1848 年の祭典行列は 2 回とも、出発の前にノイマルクト内を一回りしており、実際に行進した距離はこれよりも長かった¹⁰⁾。

こうした祭典行列の参加人数や長さについては、新聞の報道記事等にも不詳であり、祭典の年によっても大きな相違があったと考えられる。たとえば、1848 年の 1 日目の祭典行列は、その編成から見て 2 日目のものより小規模であったが、10 月 8 日に発行された *KDbl* の記事には「1,000 人を超える人びとの華やかな行列」といった表現が見られる¹¹⁾。また、1863 年の祭典プログラムでは、祭典行列の先頭が大聖堂西玄関に到着した時に、最後尾は県庁前にあるものとされた。それは、県庁から大聖堂まで伸びた行列の人垣によって、国王ヴィルヘルム 1 世を始めとする賓客たちを県庁から大聖堂まで導くためであった¹²⁾。前述のように、この祭典に国王は不在であり、このような行列による賓客の案内は現実には行われなかったが、これを実行するには祭典行列の長さは少なくとも 700 m は必要であった。また、1863 年の 10 月 16 日の *KB* によれば、この祭典行列が実際にノイマルクトを出発し、その先頭が大聖堂に到着するまでに、すなわち約 1.5 km を行進するのにおよそ 1 時間を要し、また、行程の途中で行列の通過をすべて見届けるのにおよそ 45 分もかかったとされる¹³⁾。1863 年の大聖堂建設祭では、前述のように、憲法紛争の煽りを受けて一部の住民の間には冷めた雰囲気が漂っていたが、それにもかかわらず祭典行列はかなりの規模で行われたことがこうした報道からは窺われる。

前述のように、プログラムには祭典行列の編成も示されていた。表 2 の A ～ C は、1842 年、1848 年、

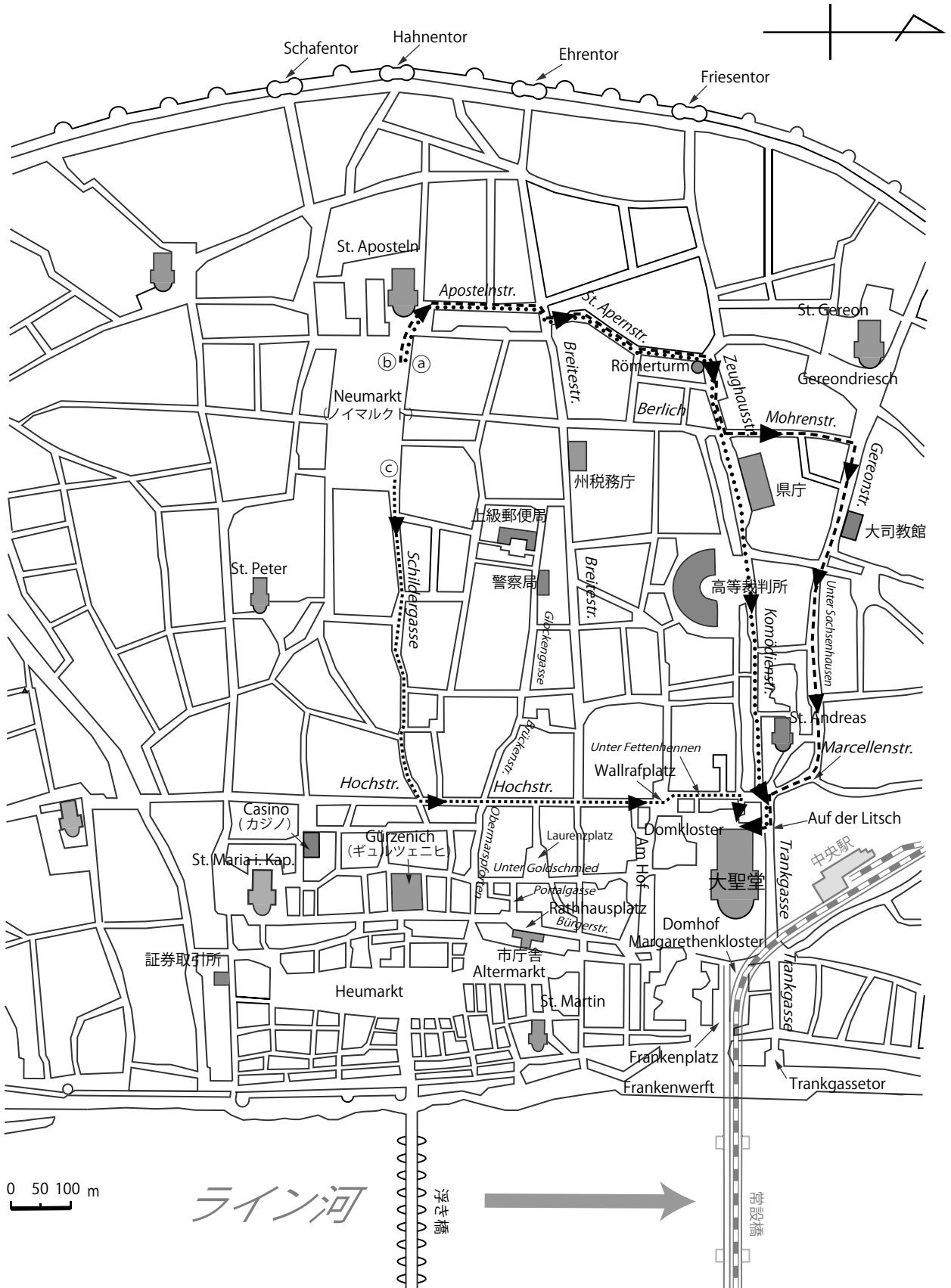


図2 大聖堂建設祭の会場及び祭典行列の経路

図中の破線・矢印で、ノイマルクトを出発する④は1842年9月4日の、⑤は1848年8月14日の、⑥は1848年8月15日の祭典行列のそれぞれの経路を示す。(表1の各行事日程を参照)

なお、市内の街路や建物については1845年ごろの様子を示すが、大聖堂の北に位置する中央駅は1859年12月の開業であり、大聖堂の身廊中心軸の延長線上に建設された常設橋は1859年10月の開通である。

出所：筆者作成。

表 2 - A 1842年の祭典行列編成

■祭典行列① ^{※1}	
1)	第1音楽隊。
2)	協会旗（20人の協会長老）。
3)	大聖堂建設監督（Dombaumeister）と建設職人。
4)	大聖堂建設中央協会の理事。
5)	地方の支援協会の理事及び代表団。
6)	第2音楽隊。
7)	大聖堂建設中央協会の会員。
■祭典行列② ^{※2}	
1)	音楽隊。
2)	協会旗。
3)	大聖堂建設監督と建設職人。
4)	大聖堂建設中央協会の理事。
5)	地方の支援協会の理事及び代表団。
6)	ケルンの教区司祭。
7)	神学校（Priester-Seminar）の生徒。
8)	大聖堂参事会員。
9)	大司教。
10)	国王陛下とその他の賓客。
11)	大聖堂建設中央協会の会員。

註：※1 9月4日の朝にノイマルクトを出発し、大聖堂西玄関まで行進した祭典行列。表1-Aを参照。

※2 9月4日の大聖堂でのミサの終了後、西玄関を出て大聖堂広場（Domhof）まで行進した祭典行列。表1-Aを参照。

出典：KDbI, Nr. 9, 28. August 1842.

表 2 - B 1848年の祭典行列の編成

■祭典行列①及び② ^{※1}	
1)	騎馬音楽隊。
2)	市民軍の騎馬部隊と第1音楽隊。
3)	合唱隊（2つのギムナジウム及び高等市民学校の合唱隊に男声合唱協会を加えて編成）。
4)	孤児院の子どもたち。
5)	市民軍の第2音楽隊。
6)	大聖堂建設工房（Dombauhütte）の職人。
7)	協会旗。
8)	大聖堂建設中央協会の理事。
9)	地方の支援協会の代表団。
10)	第25連隊の音楽隊。
11)	大聖堂建設中央協会の会員。
12)	中小の大聖堂建設協会。 ^{※2}
13)	第16連隊の音楽隊。
14)	市民軍の1部隊。
■祭典行列②の招待者 ^{※3}	
・ケルン市の市長、助役、市議会議員。	
・ケルン市の救貧局と学校監督局の役員。	
・商業会議所の役員。	
・ケルン市の行政官庁の上級官吏。	
・ドイツ（Deutz）市の市長、助役、市議会議員。	
・ケルン市にある国家諸官庁の上級官吏。 〔ケルン県庁、州税務庁、警察局長、上級郵便局、 高等裁判所、地方裁判所。〕	
・商業会議所の役員。	
・下級裁判所の役員。	
・弁護士。	
・カトリックの教区司祭。	
・各教会の理事（Kirchen-Vorstände）。	
・プロテスタントの教区牧師。	
・2つのギムナジウム、高等市民学校、市立の諸学校の教員と生徒。	
・上級軍事官庁の官吏と将校団。	
・ケルンを本拠とする汽船会社と鉄道会社の取締役。	
・営業協会（Gewerbeverein）の理事。	
・芸術協会（Kunstverein）の理事。	
・消防隊（Pompier-Corps）。	

註：※1 ここで示す 1) から 14) の編成は、祭典第1日（8月14日）と第2日（8月15日）の祭典行列に共通。表1-Cを参照。

※2 手工業者を中心に設立されたいわゆる「社交協会」を意味する。

※3 実際に行われた祭典行列では、上記の 10) と 11) の間に配置された。KDbI, N. F. Nr. 44, 29. 10. 1848.

出典：KDbI, N. F. Nr. 41, 30. Juli 1848; NRhZ, Nr. 71, 10.

August 1848; NRhZ, Nr. 74, 13. August 1848.

表 2 - C 1863年の祭典行列の編成

1)	音楽隊。
2)	大聖堂神学校, 実科学校, ギムナジウムの生徒とその合唱隊。
3)	上記の各学校の教員団。
4)	大聖堂建設職人。
5)	大聖堂建設中央協会の理事, 支援協会の代表団, 中央協会の会員。
6)	諸官庁の上級官吏及び役員。 (国家諸官庁の上級官吏, ケルン市及びドイツ市の代表, 及び商業会議所, 営業裁判所, 救貧局, 学校監督局の役員など。)
7)	各宗派の招待された聖職者 (カトリックを除く)。
8)	第 2 の音楽隊。
9)	音楽施設及び協会の理事。
10)	4 つの男声合唱協会。
11)	カトリックの司祭団。
12)	大聖堂参事会員。
13)	大司教と司教たち。
14)	市民協会 (Bürgerverein) の理事。
15)	親方組合 (Meisterschaft) の理事。
16)	営業協会の理事。
17)	芸術協会と芸術家協会の理事。
18)	ケルンの全イヌクスの代表。
19)	錠前親方の協会代表。
20)	第 3 の音楽隊。
21)	職人協会 (Gesellen-Verein) の代表。
22)	ケルン及びドイツ市の兄弟団と修道会の代表。
23)	大聖堂建設支部協会。

註：10月15日の朝にノイマルクトを出発し、大聖堂西玄関まで行進した祭典行列①の編成。出典に示す新聞に発表された最終プログラムに基づく。なお、10月16日の朝に大聖堂から市庁舎前広場まで行進した祭典行列②は、大聖堂建設中央協会の会員によってのみ編成される比較的小規模なものであった。表1-Eを参照。

出典：KZ, Nr. 285, 14. Oktober 1863; KB, Nr. 290, 14. Oktober 1863.

そして1863年の祭典行列の編成をまとめたものである。共通の特徴としてまず指摘できるのは、音楽隊が行列の要所をおさえていたことである。この音楽隊は、ケルンとその近隣に駐屯する歩兵連隊の軍楽隊である。軍楽隊が必ず祭典行列を先導し、多くの場合、行列の途中や最後尾あたりにも配置されていた。1848年の祭典行列には、革命下になにわかに組織された市民軍の部隊とその音楽隊も含まれていたことがわかる。また、この年の祭典行列では、音楽隊のすぐ後の合唱隊も行進の途中で歌を披露し、そのグレゴリオ聖歌が行列を見守る人びとに「敬虔な気持ちと呼び覚ました」と8月17日のKZには報告されている¹⁴⁾。こうした合唱隊が祭典行列に含まれていたのは、盛式ミサで聖歌隊の役割を担うことになっていたからでもある。他方で軍楽隊の先導とその演奏する音楽は、行列が隊列を乱さず一定の歩調で行進することを目的としたと考えられる。行列には数多くの色とりどりの旗が立ちならんだが、これも隊列を維持するための目印としての役割をもっていた。

そのほか祭典行列を構成したのは、前方からおおよそ順番に協会旗を掲げもった20人の長老、国家官吏である大聖堂建設監督と建設職人、大聖堂建設中央協会の理事と地方の支援協会の代表者、ケルン市や国家の諸機関の要職者、各種の団体の代表者、そして大聖堂建設中央協会とその他中小の建設協会の会員であり、最後の一般会員のグループが最も大人数の集団を形成した。中央協会の会員数は、1842年2月の設立時におおよそ4,800名であり、1845年ごろを境にして増加から減少に転じたと考えられるが、1863年においても3,000名の会員があった¹⁵⁾。したがって、上記の行列の長さなども考慮すると、祭典行列の参加人数は大規模なもので3,000人を上回ったと推測される。

ここで最後に言及すべきは、こうした祭典行列の通る沿道には、これを見物するために大勢の人びとが詰めかけたこと、そして祭典行列が行進する通りには華やかな飾り付けが見られたことである。家々の窓には色とりどりの、様々な種類の旗 (Flagge, Fahne, Wimpel) が掲げられ、そのほかに葉綱飾り (Laubwerk) や絨毯、生花などが沿道の建物を美しく着飾ったのである。KZの記事によれば1848年の祭典時には、プロイセンの紋章旗とならんで黒・

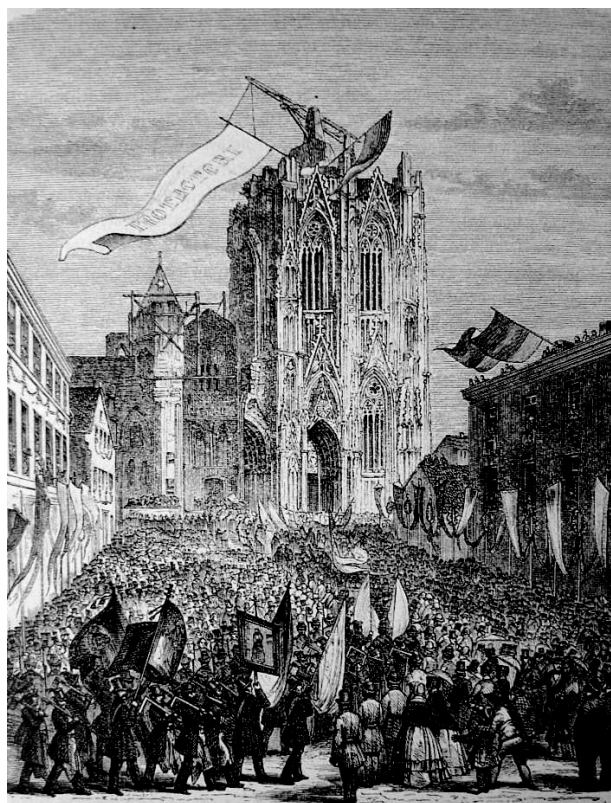


図3 祭典行列の様子（1848年10月15日）

出所：Norbert Trippen, *Das Kölner Dombaufest 1842 und die Absichten Friedrich Wilhelms IV. von Preußen bei der Wiederaufnahme der Arbeiten am Kölner Dom: Eine historische Reflexion zum Dombaufest 1980*, in: *Annalen des Historischen Vereins für den Niederrhein*, H. 182, 1979, S. 113.

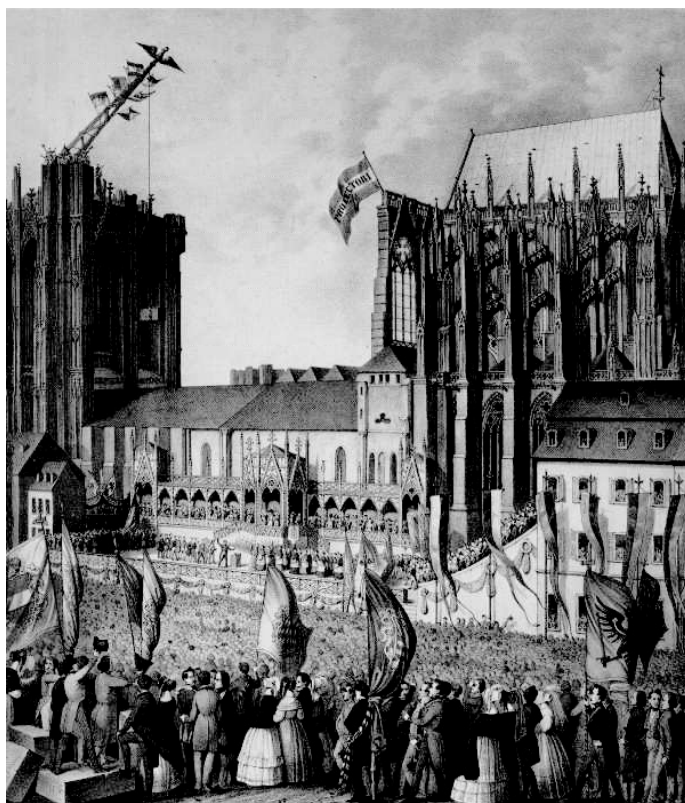


図4 定礎式の様子（1842年9月4日）

出所：Arnold Wolff, *Dombau in Köln: Photographen dokumentieren die Vollendung einer Kathedrale*, Stuttgart 1980, S. 35.

赤・金の三色旗も、街中に数多く掲げられたようである¹⁶⁾。こうした祭典行列の通る街路の華やいだ雰囲気は、図3からも十分に窺い知ることができよう。

c) 大聖堂でのミサ

1842年、1845年、1848年、1863年、そして1867年の大聖堂建設祭で、大聖堂での盛式ミサが午前中の行事の中心に位置づけられていた。これはケルン大司教がローマ式典礼に従って執り行うもので、純粋に宗教的な行事とみなすことができる¹⁷⁾。

ただし、1842年と1848年の祭典ではプロテスタントの国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世が、1867年には国王の代理としてやって来た王太子がこの盛式ミサに参列しており、またドイツの他の諸侯や高官などの招待客はプロテスタントであってもこれに参列することがあった。ここで、1842年の祭典における史上初ともいえるプロイセン国王のミサ出席は、これを一度辞退した国王に対してカトリック教会の強い要請があつて実現したものであり、このとき国王は王国内で多数派を占めるプロテスタントにも配慮し、ミサの前にケルンのプロテスタント教会で日曜礼拝を済ませた¹⁸⁾。1842年の大聖堂建設祭は、「ケルン教会紛争」で決定的な対立に至ったプロイセン国家とカトリック教会の「和解」の祭典ともみられており、上記のような国王のミサ出席問題の複雑さは、このような背景をもって理解せねばならない。

いずれにせよ、大聖堂建設祭のミサの参列者は、これに先行する行事である祭典行列の参加者とほぼ一致することになった。たとえば1842年、1848年、そして1863年の祭典では、ノイマルクトを出発する祭典行列が大聖堂の西玄関に到着すると、行列はそのまま大聖堂内へと入場していった。そして、行列の

参加者は行列を編成したグループごとに大聖堂内の所定の位置に整列してミサの開始を待ったのである。他方で、b)でも触れたように、1845年の盛式ミサと1863年の2日目の追悼ミサは、次の大聖堂建設中央協会の総会に祭典行列をもって接続しており、したがってこの時のミサの参列者の大半は、協会会員とその家族により占められたと考えられる。

d) 国王を主役とする式典

19世紀中葉の大聖堂建設祭では、大聖堂建設の強力な支援者であり、大聖堂建設中央協会の庇護者(Protector)を引き受けていたプロイセン国王の出席が必ず要請され、多くの場合、国王を主役とする盛大な式典がプログラムに入れられていた。しかしながら、国王は1845年、1863年、そして1867年の祭典への出席を様々な理由で謝絶しており、国王が観衆の前で主役を演じる式典が挙げられたのは1842年、1852年、そして1855年の3回の祭典においてであった。なお、革命のただ中に開催された1848年の祭典では、国王の来訪にもかかわらず、このような式典は初めから用意されていなかった¹⁹⁾。

まず、1842年の大聖堂建設祭は、約280年ぶりの大聖堂の建設再開を祝うものであり、ミサの終了後、史上2回目となる定礎式が大聖堂南の広場ドームホーフ(Domhof)を会場にして開催された。図4は、9月4日の定礎式の様子を示すものである。この図では、大聖堂の内陣と南塔の間の側壁に沿って屋根つきの貴賓席が設けられ、その中央に国王と王妃が席を占める八角形のパビリオンを見ることができる。そして、貴賓席の前には広いステージが設けられ、その中央に置かれた定礎石に国王がハンマーを振り下す瞬間が描かれている。また、この儀式の前に国王が行った演説は、ドイツの諸侯と人民の団結による大聖堂の建設事業を称讃するもので、会場に詰めかけた大観衆を熱狂の渦に巻き込んだとされる。この絵を見る限り、会場は見物人でぎっしりと埋め尽くされており、ステージの右に見える階段状の特別観覧席も満員の様子である。また、この観覧席横の建物の窓すべてに、式典の様子を眺める婦人たちが数多く描き込まれている。9月6日に出された*KDbl*の記事では、この会場には数千人が詰めかけ、国王夫妻が貴賓席に姿を見せると「あらかじめ設けられた観客席からのみでなく、隣接するすべての建物の窓や屋根の上から、大きな歓声が沸き起こった」と報告されている²⁰⁾。

ただし、*KDbl*に掲載のプログラムや報道記事からは、この時、式典会場への入場が厳しく制限されていた事実も明らかになる。式典の前、ドームホーフへ通じる道はすべて封鎖され、あらかじめ整列して待機することになっていた教区学校、貧民学校、孤児院などの代表児童以外は入ることができなかった。こうしたなか、ミサの終了後、再び大聖堂の西玄関を出た祭典行列は右回りに大聖堂の周囲を行進し、フランケン広場を経由してドームホーフの東の入り口(図3の右方向)から入場したのである。そして、祭典行列の参加者が会場内で配置についたのち、ドームホーフの封鎖は解かれることになったが、それは祭典行列に参加しなかった協会の会員たちを入れるためであった²¹⁾。こうした入場制限は、第一に見物人が殺到することによる会場の混乱を主催者が懸念したためであったと考えられる。他方で、協会の会員数からみて主催者は、会員のみでも会場が十分に満たされるものと判断していたようである。

次に、残る2回の1852年と1855年の式典の内容について簡単に触れておきたい。まず、1852年の祭典では、大聖堂西側の中央玄関天井部の完成を祝うことになり、ヴォールト(アーチ天井)の頂上部に国王自身が要石をはめ込む式典が準備された。このとき国王は、北塔側に仮設された階段で天井部に組まれた足場まで上り、要石が挿入される際それに手を添え、挿入後にこれを3回ハンマーで打った²²⁾。そして、表1では除外された1855年の大聖堂建設祭は、トランセプト(翼廊)の南ファサードの完成を祝う式典がその中心に据えられていた。このとき国王は、観衆の前でファサードの最上部に載る十字花飾り(Kreuzblume)に埋め込まれる証書(Urkunde)に署名をした。その後、この証書と記念の品々を収めたカプセルは、王家の紋章である鷲の模型が翼の下で抱えるようにして、高さ69メートルの最上部まで一気に引き上げられた²³⁾。

このように国王を主役とする式典では、伝統的儀礼を踏襲しつつ、象徴的道具立てをもって派手な演出がなされたのである。

e) 大聖堂建設中央協会の総会（選挙集会）

大聖堂建設中央協会は、会員たちの関心と活動意欲を鼓舞することを目的として、規約により3年ごとの総会（Hauptversammlung）の開催を規定していた。実際にこの総会は、1842年の協会設立後、1863年までほぼ3年ごとに開催された。他方で、選挙集会（Wahlversammlung）は毎年春（5～6月）に、30名の協会理事のうち10名ずつを改選するために開かれるもので、総会の開催年にはその日程に組み込まれた。そして、大聖堂建設祭が開催される際には、この総会が祭典行事の一つとなったのである。ただし、1845年の大聖堂建設祭については、そもそも第1回の総会を盛り上げるために祭典が計画されたのであり、両者の関係は逆であった。また、3年ごとに招集される総会は1863年が最後となり、そのため1867年の大聖堂建設祭では、総会ではなく選挙集会が祭典プログラムに入れられた²⁴⁾。

通常総会や選挙集会は、大聖堂の南500mほどに位置する市公会堂のギュルツェニヒ（Gürzenich）か市庁舎の大ホールで行われるのが一般的であったが、大聖堂建設祭のなかでは大聖堂東のフランケン広場（Frankenplatz）や市庁舎前広場といった屋外で開催されることになった（会場の位置については図2の地図を参照）。また、総会の日程としては、協会会長の開会の挨拶（演説）に始まり、執行委員会による協会の収支を含む活動報告が次に行われ、その後、あらかじめ用意された議案についての討論と採決が行われるのが通例であった。そして最後に、理事会選挙の投票へと移り、投票を終えた会員から会場を後にすることになった。総会が開催されなくなると、毎年の選挙集会がその役割を引き継ぐことになったが、1863年以前の選挙集会でも同様の内容の日程が生まれ、規約の改正案に関する審議なども頻繁に行われていた²⁵⁾。

この総会や選挙集会の参加者数については、議案についての採決の票数や理事会選挙の投票数で知ることができる。たとえば、1845年の総会には約2,000人の、1848年の総会には約600人の参加者があった。参加者数は1845年をピークにその後、後退が顕著であった。大聖堂建設祭の行事日程のなかで総会や選挙集会が招集されても、わずかな会員の参加しか望めなくなり、1863年の総会では280人、1867年の選挙集会では90人ほどの参加者しかなくなった²⁶⁾。

f) 祝宴

大聖堂建設祭において祝宴は、午後からの行事として重要な位置をつねに占め、国王の突然の訪問に合わせて企画された1852年の祭典を除き、必ずプログラムに含まれた。こうした祝宴は、大聖堂建設中央協会により設置された祝典委員会（Fest-Comité）が主催し、ギュルツェニヒの大ホールを会場とするのが一般的であった（会場の位置については図2の地図を参照）。

ただし、1842年の大聖堂建設祭での祝宴のみ例外であり、国王がこれを主催した。会場も大聖堂の南西の広場ドームクロスター（Domkloster）に特設された天幕であった。この年の大聖堂建設祭の日程は、プロイセン軍のライン軍事演習に合わせて決められており、祭典の祝宴で使われた天幕や料理人は国王によるライン軍事演習の視察のために用意されたものであった。*KZ*の報道などによれば、この祝宴に招かれたのは、祭典のためにケルンにやって来たドイツ諸侯のほか上級官吏や将校、市行政の要職者、そして大聖堂建設中央協会の理事であり、全部で500人もの人びとが天幕のなかで会食をした²⁷⁾。

他方で、ギュルツェニヒの大ホールでは、これよりも多い1,000人以上が宴会をすることができた。ホール内の西側正面の壇上には賓客用の特別席が設けられ、国王や他のドイツ諸侯、政府の高官や上級将校などがここにならぶことになった。そして、一段低い一般席の前方に大聖堂建設中央協会の理事や地方の支援協会の代表者などが席を占めた。一般会員でも祝宴に出席できたが、次章のウ)で確認するように、それは都市上層に属する一部の有力市民に限られたようである。賓客の多かった1848年の祭典では、プロイセン国王と帝国摂政の地位にあったヨハン大公（Erzherzog Johann von Österreich）を中心にして240名が壇上の特別席に座り、一般席の6列のテーブルにおよそ900名が着席した。それに対して、国王が出席を取りやめた1863年の祭典では、祝宴の出席者は全部で340名ほどであり、壇上の席に着いたのは大司教などの高位聖職者を中心とするわずか80名であった²⁸⁾。祝宴が始まると、国王を始めとする賓客た

ちが順に乾杯の辞を述べ、何度も乾杯が繰り返された。そして、そうした乾杯の辞の合間に、楽団による音楽と合唱団による祝祭歌が会場に響きわたったのである。

g) コンサート・舞踏会

大聖堂建設祭の夕刻から夜の行事としては、コンサートと舞踏会があった。1848年と1863年の祭典ではその両方が、1867年の祭典ではコンサートのみが開かれている。会場としては祝宴と同様、ギュルツェニヒの大ホールが使われるのが一般的であったが、1863年以降はケルンの北郊の植物園フローラ(Flora)でも、庭園コンサートが開かれるようになる。こうしたコンサートと舞踏会には、次章のウ)で見ると、基本的にチケットを購入すれば誰でも参加でき、したがって一般の市民や協会の会員を対象にした行事であったといえる。ただし、1848年の祭典1日目にカジノ(Casino)の大ホールで催されたコンサートのみ例外であり、これはケルンの男声合唱協会が前日に到着したヨハン大公やフランクフルト国民議会の議員を歓迎するために開いた催しであった²⁹⁾。

h) イルミネーション・ライン河遊覧

ライン河岸や街のイルミネーションの規模は様々であったが、1845年と1852年の祭典を除いて日没後の重要な行事として位置づけられていた。このうち1842年、1855年、そして1867年の祭典では、この時間帯に蒸気船によるライン河の遊覧航行も日程に組み込まれていたが、これは招待された賓客たちがライン河岸のイルミネーションを観覧するための行事であった。

まず、1842年の祭典では、9月6日のKZの記事によると、ライン河の両岸に1マイル(約7.5 km)にわたって、合計で10万発にも及ぶ花火の点火が準備され、国王を始めとする遊覧船の賓客たちの目を楽しませたといわれる³⁰⁾。また、1848年の祭典ではライン河の遊覧航行は日程になかったが、祭典2日目の夜には街全体を包み込む大規模なイルミネーションが企画された。KZの記事によれば、この日は大聖堂や街の主要な建造物が花火の炎に照らされたのみでなく、すべての家々に灯りがともされ、夜遅くまで街中に人が溢れたと報告されている³¹⁾。

そして、常設橋の定礎式なども合わせて祝われた1855年の祭典では、1842年と同様に、ライン河岸にイルミネーションの重点が置かれ、これを観覧する遊覧航行も行われた。その様子は、2日後(10月5日)のKZの記事で詳しく報じられている。この日は、夕暮れとともに打ち上げ花火や照明弾、祝砲が次々と発射され、イルミネーションの開始を予告した。そして、国王を始めとする賓客たちは午後8時に、三角旗や葉綱飾りで華やかに飾られた3隻の蒸気船に分乗し、遊覧航行に出発した。この3隻は白と赤のランタンによって識別できる国王の乗船「ケーニヒ」を先頭に進んでいったが、その進行に合わせて準備されていたベンガル花火に次々と点火され、大聖堂や数多くのロマネスク教会、市庁舎の塔、トランクガッセ門や税関の建物、そして港に停泊中の船などが青白い炎によって明るく照らし出された³²⁾。

i) ランタン行列(Fackelzug)

ランタン行列は、ケルンに宿泊する賓客を歓迎するために行われるもので、1842年と1848年の大聖堂建設祭で夜9時以降の行事として実施された。1863年の祭典に際しては、KDbIに最初に発表されたプログラムには国王を歓迎するための行事として含まれたが、その後すぐに削除されている。

まず、1842年の祭典前日に行われたランタン行列は、KZの報道によると集合場所の聖ゲレオン教会前を出発して国王と王妃の滞在する県庁へと向かった。そして、県庁前に到着して整列すると祭典委員会の代表が前に進み出て、国王と王妃に合唱の献上を申し入れた。この申し入れが許諾されると、合唱隊により3曲が、国王への謝辞の言上を間に挟みながら歌われた。この間、国王と王妃は県庁のバルコニーに留まり、歌に聴き入ったといわれる³³⁾。また、1848年の祭典1日目のランタン行列はKDbIとKZの記事によると、県庁前で国王とヨハン大公に、大司教館の前でローマから派遣された教皇特使に歓迎の挨拶と合唱を献上したのち、フランクフルト国民議会議長のガーゲルン(Heinrich von Gagern)やプロイセン国民議会の議員団の宿舎にも立ち寄った。このランタン行列により歓迎を受けた賓客たちはみな、バルコニーから謝辞を述べたとされる³⁴⁾。

こうしたランタン行列の規模も昼間の祭典行列とひけを取らなかったようである。*KDbl* の記事によると、1848 年のランタン行列には 1,000 人を上回る人びとが参加したとされる。ここでも音楽隊が先頭に立ち、これに続いて男声合唱協会による合唱隊と一般の大聖堂建設中央協会の会員が隊列を組み、様々な種類の旗をはためかせながら行進した。参加者たちは蠟燭の火の入った色とりどりのランタンを手にしてしたが、ランタンには大聖堂の絵、プロイセン王家やケルンの紋章、「ドイツ帝国」の鷲などが描かれ、大聖堂建設中央協会の標語である「調和と忍耐」などの文字も見られた³⁵⁾。

以上のように整理される a)～i)のおもに 9 つの行事が、19 世紀中葉のケルン大聖堂建設祭の基本的な構成要素である。大聖堂建設祭は、確かに大聖堂の建設を祝うことを第一の目的にするものであったが、早朝から深夜にかけて市内各所で催された多様な行事による複合的祭典としての性格をもっていた。とくに大聖堂での盛式ミサと式典が終わってのち、午後から夜にかけて行われる諸行事では娯楽的な趣向が強く加わり、参加者たちの関心も大聖堂そのものから雑多な方向に逸れる傾向にあったと考えられる。

2. 「新聞広告」に見る大聖堂建設祭

ケルンで発行される新聞各紙の広告欄には、大聖堂建設祭の 1 週間ほど前から、各種行事に関係する様々な広告が掲載された。広告主としては祭典の主催者である協会の執行委員会や祭典委員会によるものが最も多く、祭典に協賛する男声合唱協会などの各種団体や、営利を目的とする商人などによる広告も多く見受けられた。こうした広告は、祭典プログラムや新聞の報道記事だけでは窺い知ることのできない大聖堂建設祭のいわば「裏事情」を知る上で重要な手がかりとなる。以下では、おもに前章で整理した行事を単位として、関連する広告の解説を進めることにより、複合的な祭典の隠された諸相を明らかにしていきたい。

ア) 祭典行列とランタン行列

図 5-1 は、1842 年の祭典行列に関する祭典世話人 (Fest-Ordner) による新聞広告である。この広告が、祭典の 2 日前の 9 月 2 日に *KZ* と『ライニッシェ・ツァイトゥンク』(以下 *RhZ* と表記) に同時に掲載された。この広告において、字間を広げて読者に最も注意が喚起されているのは、行列の参加者は必ずノイマルクトに集合せねばならず、「途中では、誰も行列に受け入れられない」という点である。それに続けて、集合場所のノイマルクトへの入場は「協会徽章 (Vereinszeichen) をつけた者だけが許される」と述べられている。また、広告の中ほどでは、ノイマルクトでは旗を目印に整列するように指示もなされている。そして最後では、協会理事会により「厳粛なる祭典」の進行を託された「祭典世話人の指示に、すべての参加者が従う」ことが強く求められている。

この広告から、行列には徽章をつけた会員のみが参加を許され、ノイマルクトで隊列を整えて出発した行列に行進の途中で加わることが厳しく禁じられていたことがわかる。1842 年の大聖堂建設祭では、*KDbl* に掲載された祭典プログラムにおいてすでに、会員は教区ごとに指定された場所で 2 銀グロッシュンを支払って協会徽章 (Vereins-Abzeichen) を受け取っておくこと、そして祭典行列の際にこれを上着の一番上のボタン穴につけて集まることが段取りとして示されていた。また、このプログラムでは、各教区から出される 70 人の祭典世話人が、左腕に赤と白のリボンをつけ祭典行列の整理に当たることにも言及されていた³⁶⁾。上記の広告は、こうした段取りを周知徹底させるために、祭典直前に上記の 2 紙に掲載されたのである。

この年の祭典に際しては、図 5-2 のような広告も見られた。これは 9 月 1 日の *KZ* に掲載されたもので、マリア・ヒンメルファールト教区の会員に徽章 (Erkennungszeichen) の受け取りを促すものであった。また、その翌日の *KZ* には、ケルンに派遣される地方の支援協会の代表者に対して、ノイマルクト

Festzug am vierten September.

Der Vorstand des Central-Dombau-Vereins hat die Ordnung während des Zuges und der ganzen Feier unsern Händen anvertraut. Wir bitten daher die Vereins-Mitglieder, folgende Vorschriften pünktlich zu beachten. Die Vereinsmitglieder, welche an dem Zuge in dem Dom und aus diesem auf dem Domhofs theilnehmen wollen, müssen sich auf dem Neumarkte versammeln; unterwegs wird niemand in den Zug aufgenommen. — Der Zugang zu dem abgesperrten Neumarkte wird um 7 Uhr Morgens an der östlichen Seite geöffnet. — Nur diejenigen werden eingelassen, welche das Vereinszeichen nach Vorschrift tragen. — Die Theilnehmer ordnen sich in Reihen von zwölf Mann hinter den auf dem Platze in Zwischenräumen aufgestellten Fahnen; beim Abzuge jedoch gehen sie zu vier und vier. — Gleich beim Eintritte in den Dom schreiten sie rechts und links hinter der aufgestellten Reihe der Werkleute nach oben zu, während die Fahnen die Reihe hinaufgehen. — Sie sammeln sich nach beendigtem Hochamte wieder bei ihren Fahnen, und verlassen nach Anordnung der Zugführer den Dom.

Endlich bitten wir noch die Schlussworte des Festprogrammes zu beherzigen: „Der Vorstand stellt die Ordnung, ohne welche keine würdige Feier begangen werden kann, unter den Schutz des echten Bürgerfinnes der Vereinsmitglieder und besonders der Einwohner der ehrwürdigen Stadt Köln, und indem er das feste Vertrauen hegt, daß alle Theilnehmer danach zu streben, angelegentlich bemüht sein werden, ersucht er sie, den Anordnungen der Fest-Ordner Folge leisten zu wollen, damit dieses Fest, dem unsre Stadt und Land seit Jahrhunderten kein ähnliches zur Seite stellen kann, als ein dem erhabenen Zwecke und dem hochherzigen Festgeber würdiges, in der Erinnerung der auch spätern Nachkommen noch fortlebe.“

Die Fest-Ordner.

図5-1 祭典行列に関する祭典世話人による広告 (1842年)

出所: KZ, Nr. 245, 2. September 1842; *Rheinische Zeitung* (以下 RhZ と略記), Nr. 245, 2. September 1842.

Dombau-Säcular-Feier.

Einladung zur Theilnahme an einem großen Fackelzuge,

welcher bei Veranlassung bevorstehenden des Dombau-Festes

am 14. August, Abends 8 Uhr,

vom Rathhause ausgehend, den hier anwesenden Höchsten und Hohen Gästen, so wie den hohen Würdenträgern der Kirche dargebracht werden soll.

Die Legitimations-Karten, gegen welche am Montag den 14. c., Nachmittags von 4 Uhr an, eine Kofene mit Watslicht auf dem Rathhausplatz verabreicht wird, können auch heute noch gegen 5 Egr. im Locale des Gewerbe Vereins, unter Goldschmidt Nr. 24, bei Herrn Kap. Wirs, Marzellenstraße Nr. 5, Herrn Sturm, Weberstraße Nr. 38, und bei Herrn Osterwald, Apseln-Altemauer, in Empfang genommen werden.

Das Fest-Comite.

図5-4 ランタン行列に関する広告 (1848年)

出所: KZ, Nr. 222, 9. August 1848.

Dombau-Verein.

Die Dombauvereins-Mitglieder in der St. Maria-Himmelfahrts-Pfarr, denen die Erkennungszeichen noch nicht zugekommen sein möchten, belieben dieselben in der Transgasse Nr. 13 abzunehmen.

図5-2 会員徽章の受け取りに関する広告 (1842年)

出所: KZ, Nr. 244, 1. September 1842.

Dombaufest.

Legitimationskarten zur Theilnahme am großen Festzuge (15. Oct.) für diejenigen Vereinsmitglieder und Dombaufreunde, welche nicht den besonders eingeladenen Corporationen oder Genossenschaften angehören, werden angegeben in unserm Vereins-Secretariate (Rathhausplatz Nr. 3): Montag, Dienstag und Mittwoch, jedesmal Nachmittags von 3 bis 6 Uhr.

Der Verwaltungs-Ausschuß des Central-Dombau-Vereins.

図5-3 祭典行列の参加資格証の受け取りに関する広告

(1863年)

出所: KZ, Nr. 283, 12. Oktober 1863.

Fest der Grundsteinlegung.

Sitzplätze zu der östlichen, neben dem Dome errichteten Estrade sind à 5 Thlr. heute Sonntag von Morgens 6 bis 8 bei Herrn Jakob Haan an St. Laurentz Nr. 7 und von 9 bis 11½ im germanischen Hofe bei Herrn Wasserfall auf dem Margarethen-Kloster zu haben.

Die Karten zu dieser Estrade werden am Aufgange auf dem Margarethen-Kloster und an der Thüre neben der großen Sakristei (nördlicher Seiten-Gang des Chor's) vorgezeigt, aber erst auf der Estrade selbst an der auf der Karte bezeichneten Bank abgegeben.

Einzeichnungs-Listen für diejenigen Personen, die noch nicht Mitglieder des Vereins sind, liegen an den bezeichneten Stellen offen und werden den neu eingeschriebenen die Vereins-Erkennungszeichen verabreicht.

Die Zugänge zu den Estraden werden gegen halb 11 Uhr geöffnet.

図6-1 定礎式の特別観覧席に関する広告(1842年)

出所: RhZ, Nr. 247, 4. September 1842.

① Dombauefest.

Schattige Plätze zur Ansicht der Feiertlichkeiten sind auf einem Balkon, wie auch an Fenstern per Person 1 Thlr. am Hof Nr. 37 zu haben.

② Dombau-Fest.

Schattige Plätze, wo man die Grundsteinlegung und Ceremonien genau sehen kann, sind am Hof Nr. 28 zu vermieten.

③ Zum Dombauefest

sind noch zwei Fenster und einzelne Plätze zu vermieten, Dombhof Nr. 32.

④ Dombhof Nr. 59

sind noch einige Fenster und Localitäten für den kommenden Sonntag zur Ansicht des glänzenden Festzuges zu haben.

⑤ Dombauefest.

Zu der bevorstehenden Dombau-Feiertlichkeit sind auf dem Dombhofe noch 2 Fenster, wo man die schönste Ansicht des Ganzen vor sich hat, zu vermieten. Das Nähere bei Herren-Kleidermacher Bollberg, unter Goldschmidt Nr. 17.

図6-2 定礎式の見物席に関する広告(1842年)

出所: ① KZ, Nr. 246, 3. September 1842; RhZ, Nr. 244-246, 2-4. September 1842. ②~⑤ KZ, Nr. 246, 3. September 1842.

(Heumarkt) の証券取引所で協会徽章を受け取るよう案内する広告も、協会の執行委員会により出されている³⁷⁾。このような広告から、祭典行列などに参加する会員への徽章の配付が急がれていた様子を知ることができる。

1863年の大聖堂建設祭でも、同様の規制に気が配られていたようである。KZなどに掲載された祭典プログラムでは、祭典行列に参加する会員はシュロの枝をボタン穴にさしてノイマルクトに集まるように指示があったが³⁸⁾、事前に「参加資格証 (Legitimationskarte)」の取得も必要とされた。図5-3は、大聖堂建設中央協会の執行委員会によってKZとKBに繰り返し出された広告である。ここでは特別に招待された団体に属さない者で、10月15日の祭典行列に参加を希望する会員に対して、指定された日時に協会の事務局でこの資格証を受け取るよう案内がされている。

夜間に行われるランタン行列についても、参加者を規制するための同様の措置がとられたようである。ランタン行列は、前章のi)で見たように1842年と1848年の祭典のみで行われたが、その参加資格についても新聞などで繰り返し案内が出されている。図5-4は、1848年8月9日のKZに祭典委員会により出された広告である。これによると、ランタン行列に参加を希望する者は、あらかじめ指定された場所で5銀グロッシェンを支払って「資格証 (Legitimations-Karte)」を受け取っておく必要があった。そして、当日は午後4時から、集合場所である市庁舎前広場で、この資格証と引き替えにランタンを受け取るよう指示がされている。また、1842年のランタン行列については、資格証の交付を受けた参加予定者を集める会合が開かれ、そこで行列の編成の確認や歌の練習などが行われていたことが、その年の9月1日にKZに掲載された広告で知ることができる³⁹⁾。

祭典主催者が最も危惧したのは、祭典行列が隊列を乱して、その行進に大きな遅れが生じることであったと思われる。前述のように、行列によって賓客を案内する予定が組まれていたり、行列が接続する盛式ミサに参列する賓客が大聖堂で待機していたりする場合はなおさらであった。ランタン行列についても、それを宿舎で待ち受ける賓客が必ずいた。祭典主催者は行列の秩序ある行進のために、その誘導や整理に当たる祭典世話人や「行列指導員 (Zugführer)」⁴⁰⁾などを任命し、協会徽章や参加資格証によって一般会

Dombaufest zu Köln.

Karten zu dem am 15. October d. J., Nachmittags 3 Uhr, im großen Gürzenich-Saale Statt findenden

Fest-Essen

werden auf den Namen der resp. Teilnehmer am Montag den 12. d. M., in den Vormittagsstunden von 11 bis 1 Uhr, im Dombau-Secretariate auf dem Rathhausplatze gegen Entrichtung von 2 Thlr. 15 Sgr. ausgestellt. Die Zahl der auszugebenden Karten ist auf 360 beschränkt.

Auswärtige Teilnehmer belieben ihre Aufträge gegen Einsendung des Betrages an den Redacteur des Central-Dombau-Vereins, Herrn Kellers zu richten.

Köln, den 3. October 1863.

Das Dombau-Fest-Comité.

図7-1 祝宴に関する広告 (1863年)

出所 : KZ, Nr. 282-283, 11-12. Oktober 1863; KB, Nr. 288, 11. Oktober 1863.

Dombaufest zu Köln.

Zu dem am 15. October d. J., Abends 9 Uhr, im großen Casino-Saale Statt findenden

Fest-Gala-Balle

werden auf den Namen lautende Einzelfkarten am Montag den 12. d. M., Vormittags von 11 bis 1 Uhr, im Dombau-Vereins-Secretariate (Rathhausplatz Nr. 3) angefertigt. — Der Preis eines Einzelfickets ist auf 1 Thlr. 15 Sgr., der eines Familiensickets auf 3 Thlr. festgesetzt. Zur Familie gehörige Söhne bedürfen eines Einzelfickets.

Die Ausgabe der Karten kann, mit Rücksicht auf die Knäulichkeiten und die Betheiligung vieler Ehren Gäste, nur in beschränkter Zahl erfolgen.

Cassa findet nicht Statt.

Auswärtige wollen ihre Aufträge unter der Adresse des Ball-Comité's auf dem Dombau-Vereins-Secretariate abgeben.

Köln, den 6. October 1863.

Das Dombaufest-Comité.

Im Auftrage desselben:

Das Ball-Comité:

Rob. Effer II. jr., Ed. Oppenheim, Boigtel, C. v. Wittgenstein.

図7-2 舞踏会に関する広告 (1863年)

出所 : KZ, Nr. 282-283, 11-12. 1863; KB, Nr. 288, 11. Oktober 1863.

Dombaufest in Köln.

Zu dem Feste und dem Fest-Gala-Balle am 15. October werden noch Karten, so weit der Raum es gestattet, auf dem Dombau-Secretariate Donnerstag den 15. ausgegeben.

Köln, den 13. October 1863.

Das Fest-Comité.

図7-3 祝宴と舞踏会に関する広告 (1863年)

出所 : KZ, Nr. 286, 15. Oktober 1863.

員のグループに「異分子」が入り込まないように注意を払ったのである。

イ) 式典

前章の d) で述べたように、1842年の定礎式の会場には大観衆が詰めかけ、図3では特別観覧席も満席の様子に描かれていた。図6-1は、*RhZ* に式典当日に出されたこの特別観覧席についての広告である。この広告により、観覧席の料金は1人当たり5ターラーとかなり高額であり、そのチケットは当日の朝に、会場の近くの商人ハーン (Jakob Haan) と同ヴァッサーファル (Bernhard Wasserfall) のところで購入できたことがわかる⁴¹⁾。5ターラーは当時の雇職人や労働者の賃金の1～2週間分に相当する額であり、チケットを購入できたのは裕福な市民に限られたと考えられる。そして、祭典の当日、この観覧席には空席が目立っていたことが、市の年代記編纂者 (Stadtchronist) により報告されている⁴²⁾。すなわち、図2に描かれた特別観覧席の様子には誇張が含まれていたのである。

他方で、*KZ* と *RhZ* には定礎式や祭典行列の見物席を提供する数多くの広告を見つけることができる。図6-2の①～⑤は、両紙に掲載された広告のなかからその幾つかを拾い集めたものである。これらの広告により、大聖堂南のドームホーフに面したバルコニーや窓の見物席が、一般の人びとに数多く貸し出されていたことがわかる。①の広告では、1人当たり1ターラーで「バルコニーか窓辺に、式典を観覧するための日陰の席」が提供されている。⑤の広告には、「間近に迫った大聖堂建設祭の見物に、全体の素晴らしい眺めが眼前に広がるドームホーフの2つの窓を、まだ貸すことができる」とある。前章の d) で言及したように、定礎式では「隣接するすべての建物の窓や屋根の上から、大きな歓声が沸き起こった」とされるが、その背景にはこのような見物席の貸し出しがあったのである⁴³⁾。この定礎式では、入場制限のあった式典会場のなかよりも、むしろそのすぐ外側で興奮した熱気が満ちていたと想像される。

ウ) 大聖堂建設祭における祝宴・舞踏会・コンサート (1863年)

図7-1の祝宴に関する広告は、1863年の大聖堂建設祭に際して、祭典委員会により10月11日の*KZ* と同日の*KB* に出されたものである。前章の f) でも述べたように、この時の祝宴も1,000人以上を収容できるギェルツェニヒの大ホールで開催されたが、出席者はわずか340人であった。憲法紛争の煽りを受けながら祭典の準備が進められたこともあり、主催者は初めから祝宴の規模を抑えたとも考えられるが、その主催者である祭典委員会により繰り返し出された広告からは興味深い事実が幾つか見えてくる。

この広告からはまず、祝宴の参加者を一般会員ないし住民から、料金を徴収して広く募集していたことがわかる。この祝宴のチケットは「今月12日 (月曜日) の午前11時から [午後] 1時の間に、市庁舎前広場の大聖堂建設協会の事務局で、2ターラー15銀グロッシェンの支払いにより、記名式で (auf den Namen der resp. Teilnehmer) 発行される」とある。最初に驚かされるのは、ここでも1人当たりの料金がかかなり高額であったことである。大聖堂建設中央協会の年会費が1ターラー以上とされていたことから、会費の最低額をやっと納めるような会員はこの祝宴の対象外であったことは明らかである。たとえば、初等学校の男性教師は、その入会率がかかなり高かったことで知られるが、1863年の彼らの年間給与の平均は300ターラーほどであり、2ターラー15銀グロッシェンの祝宴の料金は彼らの月収の10%以上に相当した (1ターラー=30銀グロッシェン)⁴⁴⁾。すなわち、年収が通常200ターラーに満たなかった労働者や雇職人はもちろんのこと、初等学校の教師や小営業者たちの属する都市中間層の大部分も、この祝宴から締め出されていたといえる。また、購入者が他人に譲渡できない「記名式」のチケットも、この祝宴の社会的排他性を示している。

ここでもう一点、注目すべきは、チケットの発行枚数が350に限定されていたことである。ところが、このような限定にもかかわらず、これと同じ広告がチケットの販売日を先にずらしながら祝典前日の10月14日まで繰り返し*KZ* と *KB* に掲載されている。このことからチケットの売れ行きが芳しくなかったことは明らかである。そして、実際に行われた10月15日の祝宴の出席者は、前述のようにチケットの限定枚数を下回る340人であり、一般席で会食したのはわずか260名に過ぎなかった。

この祭典の同じ日に、カジノの大ホールで開催された舞踏会についても、新聞広告から同様の様子を窺

D o m b a u f e s t i n K ö l n .
Freitag den 16. October 1863
im großen Gürzenich-Saale:
Großes Vocal- und Instrumental-Concert,

unter Leitung des städtischen Capellmeisters
Herrn Ferdinand Hiller,

und unter Mitwirkung der Frau **Harriets-Wippers**, Königl. Hof-Opernsängerin aus Berlin; des Fräulein **Schred**, Concert-Sängerin aus Bonn; des Herrn **Niemann**, Königl. Hof-Opernsängers aus Hannover; des Herrn **Linbeck** von dem hiesigen Stadt-Theater, des Herrn **Concert-Directors Joachim** aus Hannover, der geehrten Dilettanten und Dilettantinnen, des Concert-Chores und des großen Concert-Orchesters.

Zur Ausführung kommen unter Andern:

Fest-Ouverture in C-dur, Sanctus und Benedictus aus der Missa Solemnis von Beethoven und der dritte Theil aus dem Oratorium Salomon von Händel mit Begleitung der neu aufgestellten Orgel.

Anmeldungen für Billets zum Preise von 1 Thaler werden von Mittwoch Morgen 9 Uhr bis Freitag Abend 7 Uhr in der **M. DuMont-Schauberg'schen** Buchhandlung und in den Musicales-Handlungen von Gebr. **Almenräder**, **Bernh. Breuer**, **G. Klipper** und **J. F. Weber** hier, so wie im Secretariate des **Dombau-Vereins** entgegengenommen. Die bis dahin genommenen Billets werden, mit Ausnahme der für die Ehrengäste reservirten, verlost und das Nähere über die Empfangnahme der Anweisungen bekannt gemacht.

Das Fest-Comité.

図 7-4 コンサートに関する広告 (1863年)

出所: KZ, Nr. 276, 5. Oktober 1863; KZ, Nr. 278, 7. Oktober 1863; KB, Nr. 283, 7. October 1863; KB, Nr. 285, 9. Oktober 1863.

Dombaufest in Köln.

Die Verloosung der genommenen Plätze zum Concerte im großen Gürzenich-Saale findet Statt

Dinstag, Nachmittags 2 Uhr,

im Secretariate des Central-Dombau-Vereins (Rathhausplatz).

Die Anweisungen der festen Plätze werden ausgegeben **Mittwoch den 14. d. M., von Morgens 9 bis Abends 7 Uhr**, in der Musicales-Handlung des Herrn **Bernh. Breuer**, große Budengasse Nr. 1, woselbst die Inhaber von Billets dieselben in Empfang nehmen lassen wollen.

Das Fest-Comité.

図 7-5 コンサートの座席の抽選に関する広告 (1863年)

出所: KZ, Nr. 283-284, 12-13. Oktober 1863; KB, Nr. 289, 13. Oktober 1863.

Dombaufest in Köln.

Karten à 1 Thlr. zum Concert im großen Gürzenich-Saale Freitag den 16. d. M. sind noch zu haben in der **M. DuMont-Schauberg'schen** Buchhandlung hier.

Das Fest-Comité.

図 7-6 コンサートに関する広告 (1863年)

出所: KZ, Nr. 285, 14. Oktober 1863.

い知ることができる。図 7-2 もまた、KZ と KB に繰り返し掲載された祭典委員会による舞踏会に関する広告である。この広告によると、舞踏会についても協会の事務局で「記名式の入場券 (auf den Namen lautende Einlaßkarten)」を購入でき、その価格は 1 人当たり 1 ターラー 15 銀グロッシェンで、家族券は 3 ターラーであった。ただし、家族に含まれる成人男子については、個別に入場券が必要とされている。このような入場料金の設定から、舞踏会には上層市民とその子弟のみが参加可能であり、入場券が「記名式」であったことと考え合わせると、ここでも「異分子」の排除が意図的に行われていたといえる。大聖堂建設祭における舞踏会は、上層市民たちに家族とともに参加する社交の場を提供するものであり、また、上層市民の結婚適齢期の子弟たちが互いに相応しい結婚相手を見つけるための行事として企画されていたと考えられる。

さらにこの広告には、「会場の広さと多くの賓客の参加を考慮して、入場券の発行は数を制限して行われる」とあり、入場券の発行は申込者が会場の「収容定員」に達し次第、打ち切られることが示唆されて

いる。ところが、この広告も入場券の販売日をずらしながら、舞踏会の前日まで *KZ* と *KB* に何度も掲載されている。極めつけは、祝宴と舞踏会の当日に *KZ* に掲載された図 7-3 の広告である。祭典委員会はこの広告で「空席の許す限り、チケットがまだ発行される」と、祝宴と舞踏会の両方について参加者の募集をかけている。祭典委員会が期待したほど祝宴にも舞踏会にも人は集まらなかったことが推察される。

続いて、1863 年の祭典 2 日目（10 月 16 日）に予定されたコンサートについて出された広告の解説に移りたい。図 7-4 の広告は、*KZ* と *KB* の両紙に 10 月 5 日以降、繰り返し掲載された広告である。この広告の冒頭では、指揮をとるケルン市の管弦楽団指揮者ヒラー（Ferdinand Hiller）と各地から呼び寄せられる歌手の名前が紹介され、その下に演奏される曲目がならんでいる。ベートーヴェンのミサ・ソレムニスとヘンデルのオラトリオといった声楽の宗教曲が予定されていたことがわかる。そして、1 ターラーのチケットの販売が、水曜日から金曜日（10 月 7 ～ 9 日）の間に、*KZ* の発行人でもあった書籍商デュモン（DuMont）のほか 4 人の楽譜商と、協会事務局で行われることが告知されている。ここでも、1 ターラーのチケット代が中間層以下の人びとにとって決して安いものでなかったこと、また、上記のような音楽への関心も一部の市民層に限られていたことを考えると、このコンサートの対象者も初めからかなり限定されていたといえる。

また、上記の広告では、座席について抽選があり、詳細は後で通知されるとあったが、図 7-5 の広告がこの抽選についての予告案内である。これによると、火曜日（10 月 13 日）の午後 2 時に協会事務局で抽選が行われ、その翌日にブロイアー（Bernhard Breuer）の楽譜商で指定席券の受け取りができることが知らされている。チケットの販売を案内する上記の広告（図 7-4）が最後に掲載されたのは 10 月 11 日であり、その 2 日後に座席の抽選が行われていることから、チケットの売れ行きは順調であったかにみえる。ところが、この座席の抽選が行われた翌日の 10 月 14 日の *KZ* には、図 7-6 のような広告が掲載されている。ここには「チケットがデュモン・シャウベルクの書籍商で、まだ入手できる」とある。すなわち、コンサートの 2 日前に至ってもチケットは完売していなかったのである。

さらに、1863 年の大聖堂建設祭では、2 日目の午後 3 時から植物園フローラでのコンサートも計画され、これに関する広告も新聞に掲載されたが、この行事も初めから限られた人びとを対象とするものであった。株式会社の設立によって建設の進められた植物園フローラの開園は、1864 年 8 月 14 日であった⁴⁵⁾。すなわち、1863 年の大聖堂建設祭におけるフローラでの庭園祭とコンサートは、祭典に招かれた賓客と株主に完成前の植物園を公開するために企画されたものであり、また、招待客以外の入場者には 10 銀グロッシェンの支払いが要求された。この入場料はそれほど高額ではなかったが、フローラが大聖堂から北へ 2.1 km も離れた場所にあり、都市の城壁の外にあったことも考えると、この行事がケルンの多くの住民で賑わったとは考えにくい。

一般会員から参加者を募る祝宴は 1845 年や 1867 年の祭典でも、コンサートと舞踏会は 1848 年の祭典でも見られたが、関連する新聞広告はわずかしら確認されず、また、新聞の報道記事からは 1863 年の祭典も含めて、これらの行事が実際にどれほど盛況であったのかを判断することは難しい。いずれにせよ上記のような広告の読解により、1863 年のこれらの行事については、その対象者が一部の社会階層に意図的に限定されており、そして実際の参加者数は主催者の期待を下回るようになったことが明らかになるのである。その原因としては、憲法紛争の対立が市政に持ち込まれ、それにより国王が出席を取りやめたことから、上層市民の間に興ざめの雰囲気が出ていたことがまず指摘されよう。

エ) イルミネーションと街の飾り付け

図 8-1 の①は、1842 年の 9 月 2 日の *KZ* に掲載された大聖堂建設中央協会の執行委員会によると思われる広告である。ここでは、大聖堂建設のキリスト教と祖国ドイツにおける意義が高らかに謳い上げられたのち、定礎式の夜のイルミネーションについてケルンの住民に広く協力が求められている。この日を迎える喜びが「夜になってもなお、我々の家々によって照らし出されることにより」、「愛と感謝のしるしが高らかに光り輝くように」と訴えられている。

① **Allgemeine Illumination
am nächsten Sonntag Abend
den 4. September, dem Tage der
Grundsteinlegung zum Fort- und
Ausbau unseres Domes.**

Wenn je ein Tag es werth ist, von der Kölnischen Bürgerschaft festlich begangen und freudig beschlossen zu werden, so ist es gewiß der Tag, an dem nach einer 300jährigen Unterbrechung Köln die Gewißheit erlangt, daß sein Dom, seine herrliche Kathedrale, sein hoher Ruhm und sein verdienstvoller Stolz zu Gottes Ehre und zur Freude des ganzen deutschen Vaterlandes, durch Friedrich Wilhelm IV. und sein treu mit ihm verbundenes Volk vollendet wird. Möge diese Freude, die diesen ewig unvergesslichen, segensreichen Tag in allen Herzen verkünden wird, auch Abends noch von unsern Häusern wiederstrahlen, und möge kein Dach hier in Köln so niedrig sein, daß es das Zeichen der Liebe und des Dankes an dem Abende dieses Tages nicht hoch leuchten lasse.

② **Illumination.**

Bei bevorstehenden Festlichkeiten sind Fettschaalen zu 2, 3 und 4 Pf., so wie Fettlöppchen zu 4 Pf. per Stück zu haben, Glockengasse Nr. 1.



Auf obige Anzeige empfiehlt sich zur Füllung der Tassen und Schalen mit Talg im billigsten Preise
Joh. Kürten, Becklich Nr. 2.

③ **Illumination.**
Mehrere tausend Fettlöppchen, zu 2½, 3 und 4 Pf. per Stück, sind zu haben bei Wb. Fuhl, Seumarkt Nr. 24.

④ **Illumination.**
Tassen, Köpfschen und schöne farbige Gläser, mit geschmolzenem Talg gefüllt, gut und billig bei
Wm. Hubert Kürten,
Seife- und Lichte-Fabrikant, Johann-
straße Nr. 88.

⑤ **Illuminations-kerzen Waarfs-
platz Nr. 8.**

⑥ Bei bevorstehender Beleuchtung empfehle ich mich mit Talglöppchen. Wwe. Garzheim,
gr. Witschgasse Nr. 5

⑦ **Illuminations-Lämpchen**

sind billiger und besser zu haben, als wie bei Philipp Kürten, Warfsplatz 11, in den in der gestrigen Zeitung angegebenen Specereiladen.

⑧ Illuminations-Löppchen, welche 3 Stunden brennen, per Stück 10 Pf., größere 1 Egr.
Buntfarbige Gläser zu 2 und 2½ Egr., so wie beste Talglöppchen zum billigsten Preise bei

Philipp Kürten.
Gefällige Bestellungen erbitte Warfsplatz Nr. 11, indem in meiner Fabrik am Schlachthause solche nicht angenommen werden.

⑨ **Illuminations-Gläser**

zu 7½ Egr. per Duzend zu haben
Waarfsplatz 110.

図8-1 イルミネーションに関する広告 (1842年と1848年)

出所: ① KZ, Nr. 245, 2. September 1842. ② KZ, Nr. 244, 1. September 1842; KZ, Nr. 246, 3. September 1842. ③ KZ, Nr. 245, 2. September 1842. ④~⑤ KZ, Nr. 246, 3. September 1842. ⑥~⑧ KZ, Nr. 224, 11. August 1848. ⑨ Neue Rheinische Zeitung, Nr. 74, 13. August 1848.

① **Zum großen Dombau-Feste.**

Um die Beschaffung geschmackvoller und billiger Decorationen zu erleichtern, haben die Mitglieder des gewählten Decorations-Comité's es übernommen, die Anschaffung von Guirlanden mit und ohne Blumen, Inschrift-Tafeln mit Laub-Einfassung, Transparenten, Fahnen etc. zu vermitteln. Da bereits von vielen Seiten Anfragen an das Comité ergangen sind, so können fernere Bestellungen nur berücksichtigt werden, wenn sie bis zum 12. October bei den Herren: Kamp, Altenbergerstraße 19; Eul, Königl. Hof-Tapezierer, Appellhofplatz 6; Winkel, Rouleaux-Fabrikant, Herzogstraße 2; Dickopf, Vertrudenhof zum „Großen Kometen“, eingehen.

Das Comité.

② **Dombaufest.**

Beim Beginn der Dombau-Festlichkeiten erlaubt der unterzeichnete Vorstand sich, seine geehrten Mitbürger wiederholt darauf aufmerksam zu machen, ihre Häuser durch Flaggen etc. zu schmücken, um auch dadurch unsere Vaterstadt in einem der hohen Feier entsprechenden äußeren Schmuck erscheinen zu lassen. Der Vorstand des Bürger-Vereins.

③ **Dombaufest.**

Fahnenstangen werden zu dieser Feier unentgeltlich verliehen bei
Th. Schumacher Söhne,
Severinstraße 112B.

④ **Blumen**

zum Decoriren, so wie zur Anfertigung von Laubgewinden bei den bevorstehenden Festen empfiehlt
H. Greifer, Kunstgärtner,
Lungengasse 59.

図8-2 街の飾り付けに関する広告 (おもに1863年)

出所: ① KB, Nr. 283-284, 12-13. Oktober 1863. ② KZ, Nr. 286, 15. Oktober 1863. ③ KB, Nr. 290, 14. Oktober 1863. ④ KZ, Nr. 224, 10. August 1848.

そして、これに続く②～⑤の広告は、上記の広告と前後して *KZ* に掲載された一般の商人たちによる広告である。②と③の広告からは、脂ランプ用の受け皿や小鉢が1個あたり2～4プフェニヒで売られていたことがわかる。②には安価な獣脂の宣伝も見られる。また、④や⑤の広告では、脂ランプのほかにもランプを覆う色つきのガラスやイルミネーション用の蠟燭が宣伝されている。広告主の多くは、獣脂を原料として石けんや蠟燭を製造する企業家であった。

1848年の大聖堂建設祭でも、同様の商戦が展開されていたことが図8-1の⑥～⑨の新聞広告からわかる。⑥～⑧は8月11日の*KZ*に掲載された脂ランプの広告である。そのうち⑥は夫の雑貨商を引き継いだ未亡人ハルツハイム (Anna Cath. Hartzheim) による広告であり、⑦と⑧は石鹸・蠟燭工場主のキュルテン (Philipp Kürten) によるそれぞれ別の紙面に掲載された広告である。⑧によるとキュルテンの店では、3時間燃焼するランプが1個あたり10プフェニヒで、大きいものだと1銀グロッシェンで売られており、また、色つきのガラスが2～2 1/2銀グロッシェンであったことがわかる (1銀グロッシェン=12プフェニヒ)。そして、⑨の8月13日の『ノイエ・ライニッシェ・ツァイトゥンク』(以下 *NRhZ* と表記) に掲載された広告では、イルミネーション用ガラス (色無し) が1ダース単位で7 1/2銀グロッシェンで売られており、この価格は1個あたりに換算すると7.5プフェニヒとなる。こうしたまとめ買いも推奨されていたのである。

ランプ用の受け皿や小鉢が安ければ1個2プフェニヒ、色つきガラスでも1個2銀グロッシェンという価格は、労働者や雇職人などの都市の下層に属する住民でもその気になれば十分に手に届くものであったと考えられる。当時、ケルン大聖堂の建設に従事する石工の賃金が1日当たり14～20銀グロッシェン、ケルン・ミンデン鉄道の建設労働者の賃金が同じく12～15銀グロッシェンであった⁴⁶⁾。すなわち、上記のような祝宴、舞踏会、そしてコンサートといった上層市民に限定された閉鎖的な行事に対して、イルミネーションは広範なケルンの住民が「参加」できる行事であったといえる。

前章のh)でみたように、祭典におけるイルミネーションの中心は、ベンガル花火などの大規模な仕掛けによるライン河畔の企画にあったが、各家の窓辺に置かれた脂ランプやロウソクの無数の炎によってこそ街全体を包み込むイルミネーションが実現可能であった。新聞広告からは前章で言及した1848年の祭典時のみでなく、1842年にもこのような街全体のイルミネーションが企画され、住民に広く協力が呼びかけられていたこと、そしてそのためのランプなどが盛んに売られたことが浮かび上がるのである。

また、一般住民の協力は、街の飾り付けについても必要とされた。前章のb)では、祭典会場の中心である大聖堂の周辺のみでなく、祭典行列の通る沿道の家々も、多種多様な旗、葉綱飾り、絨毯、そして生花によって飾られていたことを指摘した。

図8-2の①は、1863年の祭典時に*KB*に掲載された祭典委員会による広告である。この広告からは「飾り付け委員会 (Decorations-Comité)」が設置され、この委員会が「趣味がよく、値段の安い装飾品の調達」を斡旋する仕事を引き受けていたことがわかる。装飾品としては花綱飾り (Guirlande)、葉飾りの縁のついた銘板 (Inscript-Tafel)、旗 (Fahne) などが斡旋の対象であり、こうした品々を取り扱う業者が数多く紹介されている。そして、②は祭典当日の10月15日の*KZ*に掲載された市民協会 (Bürgerverein) の理事会による広告である。1863年5月に設立された市民協会は、中央党の前身ともなるカトリック系の自発的結社であり、市議会の協力拒否に対抗して大聖堂建設祭の準備に積極的に協力した団体である⁴⁷⁾。この広告では、「我々の郷都 (Vaterstadt) が、崇高なる祭典に相応しい装いをもって姿を見せるよう」、旗などで家を飾るように「敬愛すべき同胞市民 (Mitbürger)」に呼びかけがされている。そして、③はその前日に出された燃料や木材を扱うテオドル・シューマハー兄弟社 (Theodor Schumacher Söhne) による広告である。同社では、祭典に協力するために旗竿を無料で貸し出していたことがわかる。

1863年より以前の祭典で、このような街の飾り付けに関係する広告はわずかしか見られない。たとえば、図8-2の④は1848年8月10日の*KZ*に掲載された広告であるが、来るべき祭典の装飾のために花や葉綱飾り (Laubgewinden) が売り込まれている。新聞に掲載された広告はわずかでも、1842年や1848年

の祭典においても祭典会場や祭典行列の沿道では、多くの住民の協力をもって華やかな飾り付けが施されたと考えられる。

おわりに

本稿では、19世紀中葉に繰り返し開催された大聖堂建設祭を、当時の新聞の報道記事と様々な広告を基本資料として、その構造の諸特徴を具体的に浮き上がらせることに努めた。*KDbl* やその他の日刊紙に掲載された祭典行事に関する記事は、確かに各行事の参加者の様子や雰囲気をよく伝えている。しかしながら、本論中でも指摘したように、報道記事には祭典行事の盛況についてしばしば誇張が含まれたことにも注意が必要であり、逆に不振や混乱などのマイナス面が取り上げられることは滅多になかった。主催者である大聖堂建設中央協会の機関紙 *KDbl* やカトリック系の *KB* はもとより、自由主義系の *KZ* にもこうした傾向がはっきり見られた。

1842年の大聖堂建設祭の直後にマルクスが編集長となる *RhZ* にも、大聖堂建設祭に対する批判的な論調は全く見られなかった。1842年9月6日に掲載された祭典に関する報道記事には、定礎式において「人民 (Volk) は国王を万歳三唱で歓迎した」といった記述のほか、国王の演説の後には「際限なく歓呼の声が続いた」といった表現も見られた。そして、*RhZ* にも本稿でもその幾つかを取り上げた祭典行事に関係する広告が数多く掲載されている (図 5-1, 図 6-1, 図 6-2 ①)。それに対して、マルクス自身が創刊に係わった *NRhZ* は確かに 1848年の大聖堂建設祭に批判的で、風刺的な批評を出すこともあったが⁴⁸⁾、他方で祭典の内実を詳しく描写する記事を載せることもなかった。そして、この新聞ですら、8月10日と13日の広告欄に詳細な祭典プログラムを掲載したほか、図 8-1 の⑨のようなイルミネーション用ガラスの広告のほか、記念メダルや「大聖堂アルバム (Dom-Album)」と題する記念図版集の広告を載せたのである。同紙は結局、その印刷所の労働者が祭典行事の見物に出かけるのを阻止することすらできず⁴⁹⁾、他方で、上記のような広告の掲載を通じて大聖堂建設祭の盛況に間接的に貢献することにもなったのである。

こうして民主主義系の新聞を含むケルンの新聞各紙に掲載された広告が、大聖堂建設祭のいわば「裏事情」を浮かび上がらせることに大いに役立った。たとえば、祭典行列やランタン行列に関して主催者の出した広告からは、こうした行列の参加について厳しい規制があり、行進中の行列の秩序維持に大きな注意が払われていたことを窺い知ることができた。また、1863年の祝宴や舞踏会に関する広告を拾い集めることによって、こうした催しが高額料金と記名式のチケットにより一部の上層市民に初めから限定されたものであり、その一方で主催者が期待したほどチケットの売れゆきがよくなかったことが明らかになった。それに対して、イルミネーションと街の飾り付けに関する広告からは、これらの催しについては主催者によりケルンの住民に広く協力が呼びかけられていたこと、そして、祭典の前には照明器具や装飾品を売り込む広告が新聞各紙に数多く掲載され、広範な住民が「参加」する行事として準備されていた様子を垣間見ることができた。

そして、こうした新聞資料の分析を通じて明らかとなった大聖堂建設祭の諸特徴のなかで、とくに興味深いのは各行事を成り立たせていた社会的構造である。各行事は、主催者、招待者、一般の参加者 (協力者)、見物人、そして傍観者といった多様な立場の人びとによって成り立っていた。たとえば、祭典行列は、主催者に任命されその秩序ある行進に責任をもつ世話人、招待されて列に加わる賓客たち、男声合唱協会のように協賛する団体の一員として参加する者、大聖堂建設中央協会の会員として希望して参加する者、そしてそれを沿道で見物する人びとによって構成された。また、定礎式などの式典では、観衆の前で儀式の主役となる国王、そのほか壇上に立ちならび儀式に参列する賓客たち、それを会場から見守る人びと、さらに会場の外に隣接する建物の窓や屋上から見物する人びとがいた。そしてギェルツェニヒの祝宴

では、招待されて壇上の特別席に席を占める賓客たち、一般席のなかでも前方に座る協会の理事たち、そして高額チケットを買って末席に連なる上層市民の会員たちがいた。各行事に集まった人びとは、各行事のなかで上記のような社会的関係性のなかに組み入れられ、一つの行事のなかでも立場によって「異なる意識」をもってこれに参加し、そこで「異なる体験」をしたと考えられる。

すなわち、本稿を通じて、大聖堂建設祭が多様な行事から構成される複合的な祭典であると同時に、各行事が多様な立場の人びとの複雑な関係性のなかで成り立っていたことが具体的に見えてきたといえる。したがって、今後、この祭典の政治文化史的な意味を解明していくうえで課題となるのは、こうした祭典の複合的構造と各行事における人びとの社会的関係性のなかで、祭典において利用された政治的シンボルの意味を一つずつ問うていくことになろう。考察の対象となるシンボルとしては、国民記念碑に位置づけられた大聖堂のみでなく、合唱の歌、演説や祝辞のことば、盛式ミサや式典における伝統的儀礼、照明器具や旗などの装飾品などがあげられよう。さらに、祭典行列、式典、祝宴、イルミネーションといった行事そのものの政治的意味を問うことも必要となろう。

〔註〕

- 1) 本稿で利用したのは、大聖堂建設中央協会（Central-Dombau-Verein）の機関紙である *Kölner Domblatt: Amtliche Mitteilungen des Central-Dombau-Vereins*（以下 *KDbl* と略記）（発行期間：1842年7月～1892年）のほか、一般の日刊紙である *Kölnische Zeitung*（以下 *KZ* と略記）（同：1802年～1945年3月）、*Rheinische Zeitung*（以下 *RhZ* と略記）（同：1842年1月～1843年3月）、*Neue Rheinische Zeitung*（以下 *NRhZ* と略記）（同：1848年6月～1849年5月）、*Kölnische Blätter*（以下 *KB* と略記）（同：1860年4月～1868年12月）である。
- 2) ドイツ近代の市民層の概念と歴史的概略については、Jürgen Kocka, *Bürgertum und bürgerliche Gesellschaft im 19. Jahrhundert: Europäische Entwicklungen und deutsche Eigenarten*, in: ders. (Hg.), *Bürgertum im 19. Jahrhundert: Deutschland im europäischen Vergleich*, Bd. 1, Göttingen 1988, S. 11-33 を参照。また、大聖堂建設運動の展開とその社会的基盤については、拙稿「1840年代のケルン大聖堂建設運動の社会的基盤——大聖堂建設協会の社会構成に関する分析——」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ（社会科学）』第12号（2010年）を参照。
- 3) Kathrin Pilger, *Der Kölner Zentral-Dombauverein im 19. Jahrhundert: Konstituierung des Bürgertums durch formale Organisation*, Köln 2004, S. 164.
- 4) プロイセン国王とフランクフルト国民議会の「駆け引き」の実際については、拙稿「48年革命とケルン大聖堂建設祭」若尾祐司・和田光弘編『歴史の場——史跡・記念碑・記憶——』（ミネルヴァ書房、2009年）271-285頁を参照。
- 5) 経緯の詳細については Thomas Parent, *Passiver Widerstand im preußischen Verfassungskonflikt: Die Kölner Abgeordnetenfesten*, Köln 1982, S. 185-233 を参照。
- 6) Dieter Düding, *Deutsche Nationalfeste im 19. Jahrhundert: Erscheinungsbild und politische Funktion*, in: *Archiv für Kulturgeschichte*, Bd. 69, 1987, S. 382. 19世紀の国民的祭典に関する歴史研究はそれほど多くない。上記のほか Jonathan Sperber, *Festivals of National Unity in the German Revolution of 1848-1849*, in: *Past and Present*, No. 136, 1992, pp. 114-138 が注目に値する。なお、わが国では、ハンバッハ祭に関する研究として南直人「ドイツ『初期』自由主義とその社会的基盤——ハンバッハ祭を中心に——」『西洋史学』96号（1986年）1-20頁が、また合唱祭に関する考察を含む最新の研究として松本彰「19世紀ドイツにおける男声合唱運動——ドイツ合唱同盟成立（1861年）の過程を中心に——」『近代ヨーロッパの探求⑩ ジェンダー』（ミネルヴァ書房、2008年）111-161頁がある。
- 7) 19世紀ドイツの祭典に関する政治文化史的観点をもった研究としては、Dieter Düding/Peter Friedemann/Münch Paul (Hrsg.), *Öffentliche Festkultur: Politische Feste in Deutschland von der Aufklärung bis zum Ersten Weltkrieg*, Reinbeck bei Hamburg 1988; Manfred Hettling/Paul Nolte (Hrsg.), *Bürgerliche Feste: Symbolische Formen politischen Handelns im 19. Jahrhundert*, Göttingen 1993 がある。ケルン大聖堂建設祭に関する近年の歴史研究としては、以下のようなものがある。Norbert Trippe, *Das Kölner Dombaufest 1842 und die Absichten Friedrich Wilhelms IV. von Preußen bei der*

Wiederaufnahme der Arbeiten am Kölner Dom: Eine historische Reflexion zum Dombaufest 1980, in: *Annalen des Historischen Vereins für den Niederrhein*, H. 182, 1979, S. 99-115; Leo Haupts, Dombaufeste 1863, 1867, und 1880 in Köln und das preussisch-deutsche Kaiserreich, in: *Rheinische Vierteljahrsblätter*, Jg. 46, 1982, S. 161-189; ders., Die Kölner Dombaufeste 1842-1880, in: Dieter Düding/Peter Friedemann/Paul Münch (Hrsg.), a. a. O., S. 191-211; Nikolaus Gussone (Hrsg.), *Das Kölner Dombaufest von 1842: Ernst Friedrich Zwirner und die Vollendung des Kölner Doms*, Ratingen 1992; Kathrin Pilger, Kasierdenkmal oder Gotteshaus? Das Ringen um die Symbolik des Kölner Doms in Kulturkampf, in: *Geschichte in Köln*, 47, 2000, S. 24-47.

- 8) *KB*, Nr. 288, 11. Oktober 1863; *KB*, Nr. 290, 14. Oktober 1863; *KB*, Nr. 291, 15. Oktober 1863; *KZ*, Nr. 282, 11. Oktober 1863; *KZ*, Nr. 285, 14. Oktober 1863.
- 9) Karl Buchheim, *Die Geschichte der Kölnischen Zeitung: ihrer Besitzer und Mitarbeiter*, Bd. 2, Köln 1930, S. 34.
- 10) *KDbl*, N. F. Nr. 43, 8. Oktober 1848; *KZ*, Nr. 229, 16. August 1848; *KZ*, Nr. 230, 17. August 1848.
- 11) *KDbl*, N. F. Nr. 43, 8. Oktober 1848.
- 12) *KDbl*, N. F. Nr. 221/222, 31. Juli 1863; *KDbl*, N. F. Nr. 223, 31. August 1863; *KZ*, Nr. 282, 11. Oktober 1863; *KB*, Nr. 288, 11. Oktober 1863.
- 13) *KB*, Nr. 292, 16. Oktober 1863.
- 14) *KZ*, Nr. 230, 17. August 1848.
- 15) 大聖堂建設中央協会の会員数の推移に関しては, Pilger, *Zentral-Dombauverein*, S. 149-153, 220-223; 拙稿「1840年代のケルン大聖堂建設運動の社会的基盤」39-41頁を参照。
- 16) *KZ*, Nr. 228-230, 15-17. August 1848.
- 17) なお, 1837年11月に「ケルン教会紛争」によりケルン大司教ドロステ・フィッシュェリンク (Clemens August Freiherr von Droste-Vischering) がプロイセン政府により逮捕され, 事実上, 解任されて以降, ケルンに大司教はしばらく不在となり, 1842年3月に大司教代理として着任したガイセル (Johannes von Geissel) がケルン大司教区を指導することになった。ガイセルはドロステがミュンスターで死去したのを受けて, 1845年11月に大司教に就任した。また, ガイセルの死後, 1866年1月にケルン大司教となるのがメルヒャー (Paulus Melcher) であるが, 彼も「文化闘争」のなかで1874年3月に逮捕され, その後, 亡命を余儀なくされる。
- 18) 拙稿「1842年のケルン大聖堂建設祭」研究代表者 若尾祐司・平成19～20年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書『ヨーロッパ「歴史の場」に関する研究』(2009年) 119-120, 127-128頁。
- 19) 1848年の大聖堂建設祭は, 中世の1248年の定礎から数えて600周年を記念するもので, 表1-Cからもわかるようになりかなり大掛かりな祭典として計画された。この祭典で国王を主役とする式典が用意されなかった理由として, 国王の出席が直前まで危ぶまれたことが第一に考えられる。革命の混乱が影響して, 国王による出席の最終的な確約は7月下旬まで引き延ばされたからである。Pilger, *Zentral-Dombauverein*, S. 170。また, 国王が出席を急に取りやめた1863年の大聖堂建設祭は, 2本の尖塔を除く内陣から長堂の完成という建設の重要な区切りを祝うものであったが, この時も国王を中心とする式典は最初から計画されなかった。
- 20) *KDbl*, Nr. 11, 6. September 1842。定礎式の様子に関しては, 拙稿「1842年のケルン大聖堂建設祭」123-125, 128-132頁も参照。
- 21) *KDbl*, Nr. 9, 28. August 1842.
- 22) *KDbl*, N. F. Nr. 91, 4. Oktober 1852; *KZ*, Nr. 153, 26. Juni 1852.
- 23) *KDbl*, N. F. Nr. 128, 1. November 1855; *KZ*, Nr. 275, 4. Oktober 1855.
- 24) 総会及び選挙集会の関する規約の規定に関しては, *KDbl*, Nr. 1, 3. Juli 1842を参照。
- 25) たとえば, 1843年, 1844年, そして1845年の選挙集会では, 投票権の委任制度に関する規約の第18条の改正案について審議と採決が行われている。Pilger, *Zentral-Dombauverein*, S. 125-130.
- 26) *KDbl*, N. F. Nr. 4, 27. April 1845; *KDbl*, N. F. Nr. 5, 8. Juni 1845; *KDbl*, N. F. Nr. 42, 27. August 1848; *KDbl*, N. F. Nr. 255, 31. Oktober 1863; *KDbl*, N. F. Nr. 269, I Blatt, 30. September 1867。総会の議事録及び理事会選挙の結果は, 必ず *KDbl* に

掲載された。

- 27) *KZ*, Nr. 248/249. 6. September 1842; Karl Schorn, *Lebenserinnerungen: Ein Beitrag zur Geschichte des Rheinlands im neunzehnten Jahrhundert*, Bonn 1898, S. 160; Pilger, *Zentral-Dombauverein*, S. 167-168.
- 28) *KZ*, Nr. 230, 17. August 1848; *KB*, Nr. 293, 17. Oktober 1863.
- 29) *KDbl*, N. F. Nr. 41, 30. Juli 1848; *KDbl*, N. F. Nr. 42, 27. August 1848; *KZ*, Nr. 229, 8. August 1848.
- 30) *KZ*, Nr. 248/249. 6. September 1842.
- 31) *KZ*, Nr. 230. 17. August 1848.
- 32) *KZ*, Nr. 276, 5. Oktober 1855.
- 33) *KZ*, Nr. 248/249. 6. September 1842.
- 34) 35) *KDbl*, N. F. Nr. 43, 8. Oktober 1848; *KZ*, Nr. 229, 8. August 1848.
- 36) *KDbl*, Nr. 9, 28. August 1842. なお、協会徽章 (Vereins-Gedenkzeichen) については、規約の第13条に、会員の連帯意識を高め、活動への積極的な参加を促すことを目的に、3年間継続して会員であるか、3年分の会費を支払った者に総会の終了時に配付される規定があった。すなわち、この時、協会徽章は1845年に予定された第1回の総会よりも前に、1842年9月の大聖堂建設祭に間に合うよう製作され、本文中にあるように代価と引き替えに会員に配付されることになったのである。
- 37) *KZ*, Nr. 243, 2. September 1842.
- 38) *KDbl*, Nr. 221/222, 31. Juli 1863; *KDbl*, N. F. Nr. 223, 31. August 1863; *KZ*, Nr. 282, 11. Oktober 1863; *KZ*, Nr. 285, 14. Oktober 1863 など。
- 39) *KZ*, Nr. 244, 1. September 1842.
- 40) *KDbl*, N. F. Nr. 41, 30. Juli 1848. なお、1848年の祭典行列では「指導委員会 (zugführendes Comité)」が行列の指導に当たるものとされた。
- 41) 広告に名前の記載される人びとの職業等については、*Adreßbuch der Stadt Köln, 1841-1864* で確認した。以下の記述についても同様である。
- 42) *Historisches Archiv der Stadt Köln*, Chronik und Darstellung, Nr. 217, 1842, Bl. 21. 当時の雇職人や労働者の賃金については、Hans Stein, *Der Kölner Arbeiterverein (1848-1849): Ein Beitrag zur Frühgeschichte des rheinischen Sozialismus*, Köln 1921, S. 19; Klara van Eyll, *Wirtschaftsgeschichte Kölns vom Beginn der preußischen Zeit bis zur Reichsgründung*, in: Hermann Kellenbenz/Klara van Eyll (Hrsg.), *Zwei Jahrtausende Kölner Wirtschaft*, Bd. 2, Köln 1975, S. 249.
- 43) *KDbl*, Nr. 11, 6. September 1842.
- 44) Budget der öffentlichen Elementarschulen zu Köln für 1863, in: *Verhandlungen der Stadtverordneten-Versammlung zu Köln*, 1862, S. VII-VIII.
- 45) Peter Fuchs (Hrsg.), *Chronik zur Geschichte der Stadt Köln*, Bd. 2: *Von 1400 bis zur Gegenwart*, Köln 1991, S. 149.
- 46) 註42)に前掲の文献を参照。
- 47) Thomas Parent, *Die Hohenzollern in Köln*, Köln 1981, S. 82-83; Pilger, *Zentral-Dombauverein*, S. 231-232.
- 48) *NRhZ*, Nr. 79-90, 18-31. August 1848.
- 49) Otto Dann, *Die Dombau-Bewegung und die Kölner Gesellschaft in der ersten Hälfte des 19. Jahrhundert*, in: ders. (Hrsg.), *Religion-Kunst-Vaterland: Der Kölner Dom im 19. Jahrhundert*, Köln 1983, S. 92-93; Parent, *Die Hohenzollern*, S. 68.